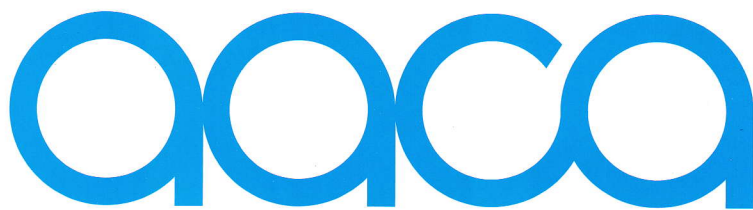


2019.4 no.83

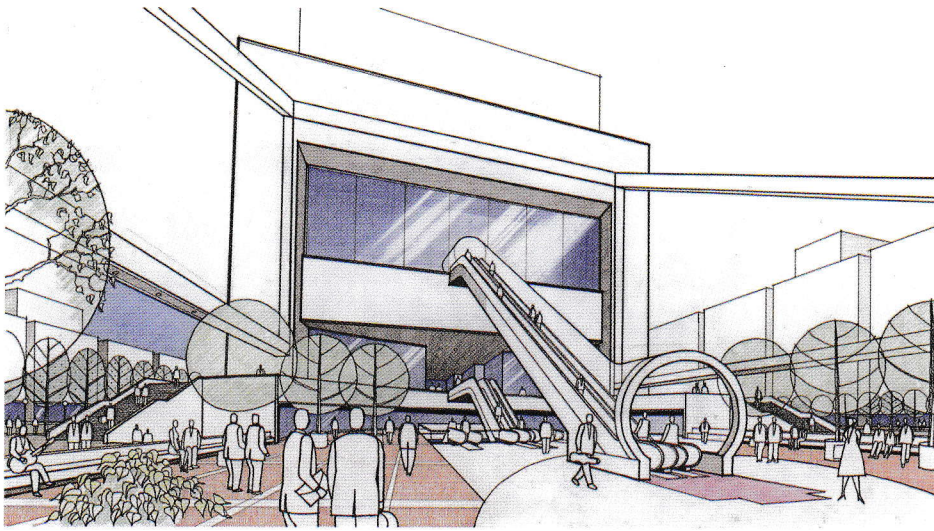


一般社団法人 日本建築美術工芸協会

設立30周年



東京芸術劇場（設計：芦原義信）



アトリウム空間

## 東京芸術劇場

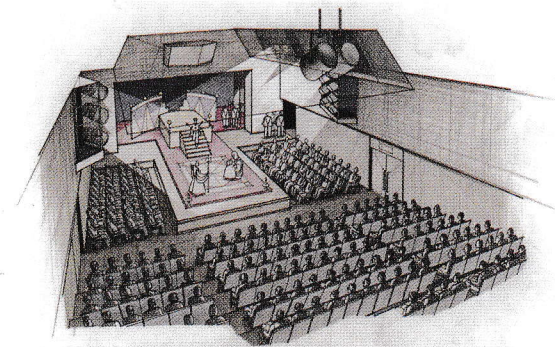
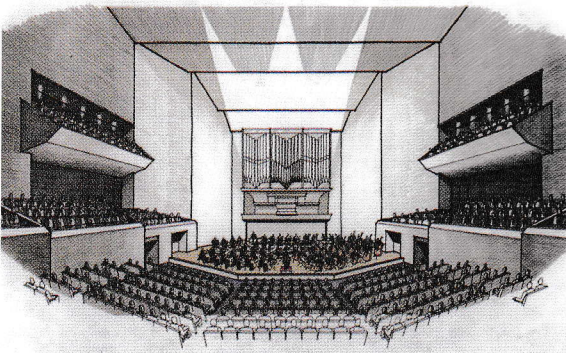
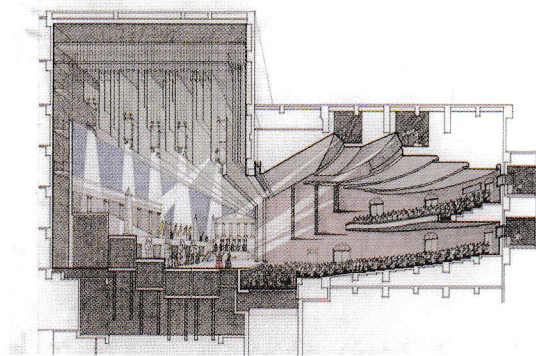
(設計：芦原義信 1990)

東京芸術劇場は、東京都が企画した「東京ルネッサンス事業」の一環で、世界に＜文化都市・東京＞を発信すると共に、優れた舞台芸術の鑑賞の場を提供し創造活動の拠点とする目的で建築された劇場で1990年に竣工した。

前面広場と連続したエントランス部分の巨大なガラス張りのアトリウムが圧巻である。一方、北側の道路に面して巨大な壁面が建ち上がり、幾何学的な外観の造形は建物全体が何か大きな立体物のように見る者に語りかける。

池袋駅西口駅前のバスロータリーや公園など周辺環境の一体的な整備に基づいて計画された当劇場では、文化都市の発信の地としての役割を担うべく、周辺広場の内外空間には40点ほどのモニュメントが展示され、行き交う人々を楽しませてくれる。エントランス正面ではクレメント・ミドモア氏のシンボリックな彫刻モニュメントが出迎え、アトリウムに入ると人混みの中に紛れて佐藤忠良作のブロンズ彫刻を見つけることができる。5層の階高を突き抜けるアトリウムの天井には金色の金属片で創られた伊原通夫氏によるモビール彫刻。そして5階広場のドーム天井には艶やかな絹谷幸二氏によるフレスコ画。街並みのようなシークエンスの中で、建築空間とアート作品との競演が繰り広げられる。

上層階から見下ろすとその先に地下階の円形のロワー広場が視界に飛び込んできた。縦横無尽に縦走する空間、このダイナミックな空間感覚はどこから来たのだろうか・・・、若き日の芦原氏にふと思いを巡らす。



掲載の建築スケッチは、武蔵野美術大学 美術館・図書館 所蔵。

(文：三上紀子)

### ○芦原義信 (1918-2003) 建築家、工学博士、東京大学名誉教授、日本芸術院会員、aaca 設立者

東京大学工学部建築学科卒業後、ハーバード大学大学院で修士号(M.Arch.)取得。1956年、芦原義信建築設計研究所(後に芦原建築設計研究所と改称)を設立。建築設計の傍ら、法政大学教授、武蔵野美術大学教授、東京大学教授を歴任。日本建築家協会会長、日本建築学会会長を務める。建築作品は、東京オリンピック駒沢公園体育館・管制塔(1964)、銀座ソニービル(1966)、モントリオール万国博覧会日本館(1967)、国立歴史民俗博物館(1972)、東京芸術劇場(1990)など多数。著書に『街並みの美学』(毎日出版文化賞)、『隠れた秩序—二十一世紀の都市に向けて—』等。勲二等瑞宝章受章、文化勲章受章など数々の賞を受ける。

CONTENTS

■平成 29 年度 設立 30 周年特別記念会・功労賞表彰式  
第 28 回 日本建築美術工芸協会賞表彰式 4



▶▶ 4

■第 28 回 日本建築美術工芸協会賞  
AACA 賞・芦原義信賞（新人賞）選考報告 8  
AACA 賞、AACA 賞 優秀賞 9  
AACA 賞 奨励賞、AACA 賞 特別賞 10  
芦原義信賞（新人賞）、30 周年記念 美術工芸賞 11

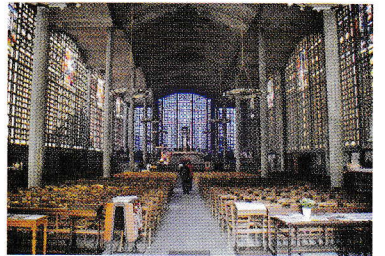
■第 28 回 日本建築美術工芸協会賞を受賞して  
AACA 賞 出島表門橋 渡邊竜一 12  
芦原義信賞（新人賞） 梅郷礼拝堂 加藤詞史 13  
AACA 賞優秀賞 越後妻有文化ホール・十日町中央公民館（段十ろう）  
永池雅人 14  
AACA 賞奨励賞 川崎技術開発センター 大森 晃 15  
AACA 賞奨励賞 伊根の舟屋 京谷友也 16  
AACA 賞特別賞 薬師寺 食堂 野田隆史 17



▶▶ 8

■時代の華一輪  
飯野毅一会員におききする 広報委員会 18

■会員活動レポート  
今振り返る一仕事・アートと趣味…そしてー 柏尾 栄 22  
「ジャポニスム 2018：響きあう魂」に参加して 高橋幸子 23



▶▶ 24

■第 194 回 aaca フォーラム開催報告  
スタンドグラスの本質  
パブリックアートとしての側面からの展望 平山健雄 24



▶▶ 25

■aaca30 周年記念事業 座談会「市中の山居」  
土木・ランドスケープ・建築・アートからのアプローチ 坂上直哉 25

■第 13 回建物視察会  
「山梨・静岡地区 建物視察会」を案内して 早津和之 26  
感性を刺激するワークスペースの創造 小堀哲也 27

■事務局だより 28



▶▶ 26

表紙撮影：新建築社写真部

# 平成 29 年度 設立 30 周年特別記念会・功労賞表彰式 第 28 回 日本建築美術工芸協会賞表彰式

- 開催日 平成 30 年 12 月 12 日（水曜日）午後 3 時～
- 場 所 建築会館大ホール（東京都港区芝 5-26-20）
- 来 賓 文部科学省 文化庁 政策課文化発信室室長

軸丸真二様  
 一般社団法人 日本建築学会 会長 古谷誠章様  
 公益社団法人 日本建築家協会 会長 六鹿正治様  
 一般社団法人 日本美術家連盟 理事長 山本 貞様

- 出席者 来賓・招待者・報道関係 8 名
- 30 周年記念特別功労賞 受賞者 16 名
- 第 28 回 日本建築美術工芸協会賞 受賞者 11 名
- 日本建築学会 学友会 13 名
- 会員・一般 100 名 計 150 名

## 日本建築美術工芸協会 岡本 賢 会長 挨拶



会長 岡本 賢

皆さま、こんにちは。特別記念会に多数お集まりいただきましてありがとうございます。

今年当協会設立 30 周年特別記念会、ということになりますので、新たな気持ちの設立記念会になったかと思えます。本日は特別にご臨席賜りました方々がいらっ

しゃいまして、文化庁から政策課文化発信室長の軸丸様、ありがとうございます。日本建築学会会長の古谷様、日本建築家協会会長の六鹿様、さらに、日本美術家連盟理事長の山本様、ありがとうございます。それから、芦原義信先生の奥様、初子様ご臨席いただきました。後ほど四人の方からご挨拶いただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

設立 30 周年記念事業ということで、いろいろと皆さま方から協賛をいただきまして、この中にも協賛をいただいた方たちが大勢いらっしゃると思っておりますので、その方々に厚く御礼を申し上げたいと思っております。

今まで 30 年経つのですが、協会の活動にいろいろご努力いただいた方々、それからご尽力、ご支援いただいた方々に対して、30 周年記念ということで、後ほど僣越ですが、特別功労表彰をさせていただきたいと思っておりますので、併せてよろしく願いいたします。

ご承知のように、当協会は創立者の芦原義信先生の理念である建築とアートの融合による美しい景観、それから、文化的な生活環境の創造を目指して、さまざまな事業を展開してまいりました。この協会の最大の特徴というのは、建築とアートに関わるあらゆる分野の方々に集まっていたことだと思います。芦原先生の気持として、来

るものは拒まずというようなことを聞いておりますので、さらに全く異なった分野の方たちがこの協会に集まっていたいただいております。その結果、さまざまな議論が全く異なった知見のぶつかり合いという形でなされておまして、全く新しい創造性に満ちたイメージが生まれることを期待できることが、この協会の特徴となっているのでございます。

つねひごろ、毎年いろいろな活動をしておりますけれども、今年の 30 周年記念事業としましては、さらに盛りだくさんの企画が展開されてまいりました。来年 3 月まで 30 周年記念事業ということでいろいろな事業を展開してまいります。けれども、さらに充実したいろいろな催し物をやりたいと思っております。

来週月曜日ですけれども、品川のサンゲツのショールームで、銀座シリーズとよく言いますが、銀座プロジェクトに関するシリーズを連続して行っておりまして、それも催しをさせていただく予定でおります。ぜひ皆さま方もご参加をお願いしたいと思っております。

今までの活動の状況を 30 周年記念の特集という形で冊子をまとめました。本日お渡しするつもりでございましたが、ちょっと手違いで今日お集まりの皆さま方には後日お送りさせていただきたいと思っておりますので、ご高覧いただければ大変幸いに思っております。

いま社会は 2020 年のオリンピック・パラリンピック、それから、25 年の大阪万博に向けて、いろいろなビッグプロジェクトが展開しており、社会も躍動している時代でございます。そのビッグプロジェクトの中には、文化的な側面というのが非常に重要ではないかというふうにも考えております。その中で当協会の活動が、そういう文化的な部分に対して大きな意味をもってくるようになれば、協会の存在がさらに高まるのではないかと期待しているところでございます。

30 周年を一つのステップとして、さらに会員の皆さま方の充実した活動、活発な活動をしていただき、この協会の存在を高めていただければというふうに思っております。本日お集まりの皆さま方、ご関係の方々もぜひご支援をよろしく願います。

本日はこのあと芦原太郎先生からご講演いただき、さらに AACA 賞の発表、表彰等もでございます。それから合唱等もございまして、その後のパーティも含めてよろしくお楽しみいただければありがたいと思っております。どうも本日はありがとうございます。

文化庁 政策課文化発信室  
室長 軸丸真二様 祝辞



軸丸真二様

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、文化庁政策課の軸丸と申します。一般社団法人日本建築美術工芸協会、設立 30 周年特別記念会および協会賞表彰式にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

はじめに、栄えある各賞を受賞される皆さまに心よりお祝い申し上げます。受賞者の皆さまにおかれましては、このたびの榮譽を契機に、今後ますますご活躍されることをお祈り申し上げます。

一般社団法人日本建築美術工芸協会におかれましては、建築にかかる美術、工芸ならびにその理念を支える人々が連携し、交流の場をつくり、社会のニーズに応えるよう文化と芸術性の恒久と関連情報の収集利用促進をするという理念のもと、会員皆さまの熱意と奉仕によって支えられ、わが国の文化の向上・発展に大きく貢献されてまいりました。

皆様方の 30 年にわたる長年の功績に敬意を表しますとともに、文化芸術に対するご理解とご努力に心より感謝申し上げます。

さて、2020 年には東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催が控えておりますが、この大会をスポーツのみならず、文化の祭典としても成功させるべく、文化庁におきましては全国津々浦々でイベントを開催し、わが国の多様で豊かな文化美術の力で世界中の人たちを引き付けられるよう取り組むこととしております。

今後、全国各地で多種多様な芸術活動が活性化することが期待されており、本日ご出席の皆さま方におかれましては、引き続きわが国の文化の振興と世界の発信強化のためにご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、皆さま方のご健勝、ご活躍と一般社団法人日本建築美術工芸協会のますますのご発展を心から祈念いたしまして、お祝いのご挨拶とさせていただきます。

平成 30 年 12 月 12 日、文化庁政策課文化発信室長、軸丸真二。本日は誠にありがとうございます。



日本建築学会  
会長 古谷誠章様 祝辞



古谷誠章様

皆さま、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました、日本建築学会 55 代目の会長を務めております古谷誠章と申します。きょうは一般社団法人日本建築美術工芸協会の特別記念会にお招きいただきありがとうございます。

この会にあたりまして、まず一言お祝いの言葉を申し上げさせていただきますと思います。

実に本年はその設立第 30 周年を迎えられる年ということで、大変長きにわたりましてこの会がさまざまな活動を展開されてここに至りましたことを、誠におめでたくお慶び申し上げたいと思います。これにあたりましては、岡本会長をはじめとして会の皆さま方のご尽力の賜物だというふうに考えて、心から敬意を表したいと思います。

この建築美術工芸協会、大変ユニークな会だと思っています。と申しますのも、私ども建築に関する者の中に、建築の技術的な側面、あるいは計画を含んだとしても建築の専門的な側面を共にするものが集まる会というのは数多くあるのですけれども、ここに建築、美術、工芸というこれに関わるさまざまなジャンルの方々が一堂に会する会はほかに例を見ないのではないかと考えます。

私どもに取りまして、とても身近な印象的な活動は、当建築会館のギャラリーをお使いいただきまして、そこで頻繁に開催されております展覧会、それからその他の催し、そこに集う、先ほど申し上げたようなさまざまな分野の方々との交流を拝見しておりますと、この建築学会としても大変うれしく、われわれにとっても刺激的な活動を展開されているなど感じます。

また、私自身はたまたまこのところ、この AACAA 賞の審査委員長も仰せつかっている関係から、半分身内のような気分でおりますが、この AACAA 賞の活動も大変素晴らしいものだと考えます。と申しますのも、その建築の、先ほども申し上げた建築の技術的側面だけではなく、そこにともにあるアートの面、美術、工芸の側面も併せて検証しようという活動でありまして、毎年それに出選される優れた作品も建築としてだけではなく、その美術、工芸の側面から見て素晴らしいもの、そういったものが折り合わさるようになって出来上がったものが選出されています。

後ほど、今年の賞に関しましてはもう一度出てきて講演の機会があるようなので、今ここで詳しく申し上げることはございませんけれども。私たちは 2011 年に震災を経験いたしました。その後、その建築のみならず、アートの力というものが多くの人々を励まして、そして、なくてはならないものとして皆さんに認識されてきたように思います。今後ますます建築、美術、工芸の結びつきを強めまして、こうした社会の皆さまが幸せに暮らせるような、そういう人々の生活環境を整えていくのが、貴会もそうですし、私

どももそうなのですが、力を合わせて取り組まなくてはならない問題ではないかと思えます。

2020年のオリンピックが目前になってまいりました。これに合わせて多くの方々が多国外からも来日されると思います。そうした方々の目にも、この東京という町が、あるいは日本の津々浦々の地域が、単にその建築的に素晴らしいだけではなく、芸術的な面を併せ持って、人々を癒し、そして幸福にするような都市計画がつけられていることを大いに祈念しているところでございます。

結びにあたりまして、この会のこれからますます重要になってくるとされるそうした使命を一丸となって、ますます豊かなわが国の都市空間、これを築き上げることを祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。

本日はどうもおめでとうでございます。

## 日本建築家協会

会長 六鹿正治様 祝辞



六鹿正治様

皆さん、こんにちは。JIA、日本建築家協会会長の六鹿でございます。さっき古谷さんが55代とおっしゃったので、建築家協会はまだ再編されてから短いので私は12代目です。たしか2、3年前にここで申し上げたと思いますが、建築家協会の起源というのは、今から132年前の造家学会、家を造る学会というわけです。その後、今から120年くらい前に建築家伊東忠太が建築をアーキテクチャという言葉の訳語として、造家ではなく建築、建てて築くというふうなことを提案して、それがすごく受け入れられて「建築」という言葉が根付き、造家学会が建築学会に改名したわけです。

当時までは、非常に建築学会も建築家であることを兼ねた人が中心だったのですが、その後、建築学会が極めて学術的な色彩の団体になってきましたので、ある段階で実務の建築家が別の団体をつくることになり、その後、紆余曲折をへて、またマッチングしないところもありまして1987年に今のJIA日本建築家協会ができました。

そのちょうど1年後のたしか1988年ですよ、日本建築美術工芸協会ができたのは。今から30年前。本当にそのタイミング的に何かある夢といいますか、象徴的なものを感じるわけでありまして、非常にその段階で結集された建築家たちと美術家、そして工芸家たちの空間においては、建築、美術、工芸が連携または一体的位置づけをすべきであるという強いメッセージをその中に感じるわけでありまして。

私自身も建築設計の実務に携わる中で、さまざまなアーティストとのコラボレーションを経験してまいりました。結果として出来上がるものは、建築単体、あるいは美術単独では決して得られないような、ある種の意味の奥行きですとか、意味の多重性といったものが空間にもたらされた

と感じております。

建築を使い、都市に生活し、環境に包まれる人々に、より多彩で、より豊饒な体験をもたらすことができたというふうと考えております。その意味で、建築と美術、および工芸を一体的に考えることで、建築家、あるいは建築家としてよりよく社会に貢献できる可能性があるのではないかと考えてまいりました。

ただし今、30年前と比べると社会の変化は加速度的にありまして、その中で建築、美術、工芸の世界においても、デジタル技術、あるいは仮想現実、あるいは時間体系、あるいは3次元の実体としては捉えにくい、そういった形態のものまでがどんどん出現してまいっております。まだ社会全体で従来のいろいろな分野やシステムの境界線があいまいになって流動化しています。そして、全く新しい概念のアートだけではなく、さまざまなものが生まれてきている状況だと思っております。そういう新しい状況に直面しつつある時代の建築、美術、あるいは工芸の関係はどのようなものになるのでしょうか。また職能としての建築家、美術家、あるいは工芸家、それぞれのあり方、あるいはその関係はどのように変化していくのでありましょうか。

今まで30年間は、非常に称賛できるような業績を伴って活動してこられたわけでありましてけれども、これからの新しい時代の変化の中においても、この建築美術工芸協会は建築と美術と工芸のよりよい関係を模索しながら、率先してさまざまな提案をしていかれることを心から期待してございます。

本日は30周年誠にありがとうございます。

## 日本美術家連盟

理事長 山本 貞様 祝辞



山本 貞様

ご紹介にあずかりました山本 貞と申します。皆さんは私共の組織に関してあまりご存じないかと思うので、かいつまんで日本美術家連盟とはどういうところか今日はちょっとお話しておこうと思います。

戦後まもなくの4年目の昭和24年、そういう荒廃した廃墟の中から数人の美術家が立ち上がり、これからの社会は文化国家のはずだということで、われわれの権益とか、そういうものを擁護するということを含めて、文化の組織をわれわれの美術家同士で仲良くやっていこうではないか、という理念で連盟が出来上がったのだと理解しております。

そのころの会員というのは100人程度のものでありましてけれども、当時の有力な画家、彫刻家たちがみんな結集しました。少し時間を飛ばしまして、それから13年くらい経ったときに、活動拠点みたいな、こちらにはこのような立派な建物がございまして、われわれもつくりたいということで、皆さんがカンパしたり奔走して、現在もございまして銀座3丁目くらいに美術会館というのをつくりまして、そこを活動拠点としていろいろやっております。

さっきお話しした、会員 100 人くらいで始まったのが、なんとその時点では 5000 人の数で全国にわたる会員の加入がございました。そしてその美術家の互助的な相互の関係とか、あるいはその音楽、…?…とか、あるいはカメラマンとかグラフィックデザイナーなどいろいろな分野との連携を横の関係でつくってまいりました。当然、こちらの協会さんも、ある時点からお付き合いをいただくようになりまして今日に至っているわけでございます。

われわれは美術家というのは、どうも皆さんご存じと思いますが、感覚的には非常に優れた豊かなものがあるのですが、どうも社会的な常識というか、知見がそういう中ではないという立場でおるわけでございます。こういったものほかの分野の方との交流の中から学びとって、シナジーといいますが、そういう効果を高めていけば、われわれも非常に良いし、組んだ方のお相手も何らかの形で満たされるものがあるだろうということで、これからどんどん横の関係の力も、また文化庁さんがここにおられるけれども、省庁とも良好な関係を保ちながら。美術家というのは一人一人は脆弱な立場ですから、集まっているいろいろな横の関係を含みながら発展していきたいと願っておるわけでありませう。

本日のこの 30 年を迎えた皆さま方と協調しながらやっていくということは、もとより 5000 人の会員が喜ぶべきことでありますので、きょうはそういうことを含めて、すでにいろいろとこちらで関わって活躍している人もいますし、今回受賞をされる澄川先生は美術家連盟の会員でもあり、ジャンルを超えたクロスオーバーな方であります。いろいろとそういうこれからは、今もお話がありましたけれども、分野を超えた関係のいろいろな創造物ができていく時代がまもなくやってくるし、もう時代は始まっていると思うんです。そういう時点の中で皆さま方と組みながら、1×2 は 2 ではなく、3 でも、4 でも、10 でも、皆さまの力とわれわれの力が加わった効果が、創造力が、クリエイティブなものが出ていけばと願っております。

30 周年の皆さま方の活躍に敬意を表し、お祝いを申し上げて、ご挨拶の結びといたします。

ありがとうございました。

## 30 周年特別表彰者

### ● 会員功労賞



澄川喜一	彫刻家
宇津野和俊	菊川工業(株) 名誉会長
飯野毅一	美術評論家
松本哲夫	剣持デザイン研究所
村松映一	建築家
坂上直哉	美術家
中島三枝子	画廊るたん主宰

### ● 事業活動支援企業

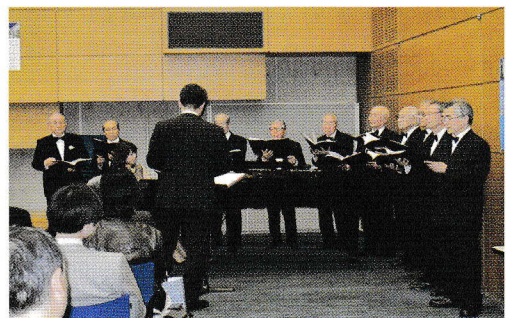


千坂真吾	スターツCAM株式会社
木原幹夫	AGC株式会社
吉川恭伴	株式会社 サンゲツ

### ● 永年勤続賞

浅野井尚子	事務局職員
-------	-------

## 30 周年特別演奏



日本建築学会楽友会 男性合唱団(AIjmc)

# 第28回 日本建築美術工芸協会賞

## 古谷誠章選考委員長 選考報告

30年度のAACA賞には、計45点の応募があった。

9月27日に開催された第一次選考会において、選考委員による投票並びに討論を行った結果、応募作品の中からAACA賞に相応しい12点を現地審査対象作品と決定した。

10月5日から11月10日にかけて、その12作品について選考委員2名以上の構成をもって現地審査に赴き、それぞれ詳細な追加資料等を入手し、設計者からの説明を聞き作品の審査を行った。

11月11日に現地審査の結果を踏まえて第二次選考会を開催し、午前中に現地審査に赴いた各委員から一作品ずつ簡単な審査報告を受け、午後にはその上で応募者によるプレゼンテーション、ならびに公開審査を行った。

プレゼンテーションおよび質疑応答の後に、各選考委員がAACA賞受賞に相当すると思われる作品4点を記名投票した結果、11人の選考委員の満票を得た作品が2点、過半数である6票を得た作品1点があり、確認のためそれ以外9作品について吟味した上で、まず上記3点をAACA賞、同優秀賞、芦原義信賞の候補とすることとし、3作品を比較して満票作品のうち「出島表門橋」をよりAACA賞に相応しいものとして選出、同じく「梅郷礼拝堂」を新人賞でもあ

る芦原義信賞に決定し、6票の「越後妻有文化ホール・十日町市中央公民館（段+ろう）」を優秀賞に選出した。

次に特別賞候補として推薦を選考委員に諮ったところ、「薬師寺 食堂」を推す意見が大半を占めたためこれを特別賞と決定した。

受賞ランクとして2票および1票を得た残りの9作品を対象として、再度奨励賞の候補を選考委員一人につき作品2点ずつ投票した結果、5票を得た「伊根の舟屋」と4票を得た「川崎技術開発センター」の2点を奨励賞に選出し、そのほかの3票以下の作品を選外とした。

以上の選考のプロセスをすべて公開のもとに行い、最終的に全作品がそれぞれの賞に相応しいか否かを再度確認し、選考委員全員の賛成をもって本年度のAACA各賞の受賞作品を決定した。

最後に、優れた美術・工芸作品を対象とした30周年記念美術工芸賞に対する推薦を求めたところ、「越後妻有文化ホール・十日町市中央公民館（段+ろう）」における、高橋匡太氏によるライティングアート作品である「光織り」の推薦があり、全員一致でこれを美術工芸賞に選出することとした。



受賞者・選考委員



■ 第 28 回 日本建築美術工芸協会賞 受賞作品

AACA 賞

「出島表門橋」

作 者：渡邊竜一  
(Ney & Partners Japan)

所在地：所在地：長崎県長崎市出島町 6-1



(撮影 © momoko japan)

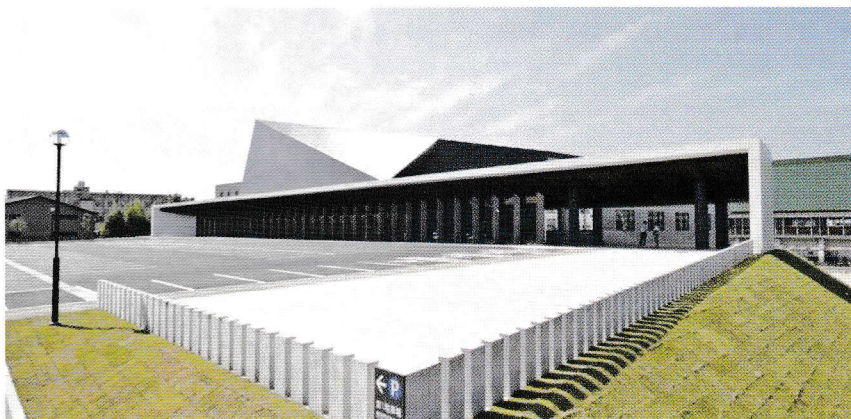
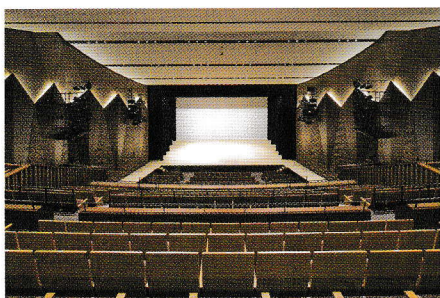


AACA 賞 優秀賞

「越後妻有文化ホール・十日町中央公民館(段十ろう)」

作 者：株式会社 梓設計 永池雅人 鈴木教久 加藤洋平

所在地：新潟県十日町市本町一丁目上 508-2



(撮影 北田英治)

## AACA 賞 奨励賞

### 「川崎技術開発センター」

作 者：株式会社 三菱地所設計 林 総一郎  
所在地：神奈川県川崎市川崎区殿町 3-25-20



(撮影 (株) PHOTOTEKA 木田勝久)

## AACA 賞 奨励賞

### 「伊根の舟屋」

作 者：京谷友也  
所在地：京都府与謝郡伊根町平田 546



(撮影 京谷裕也)

## AACA 賞 特別賞

### 「薬師寺食堂」

作 者：竹中工務店（実施設計） 野田隆史 本弓省吾  
所在地：奈良県奈良市西ノ京 457

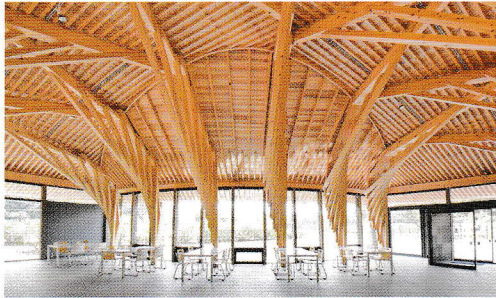


(撮影 古川泰造)

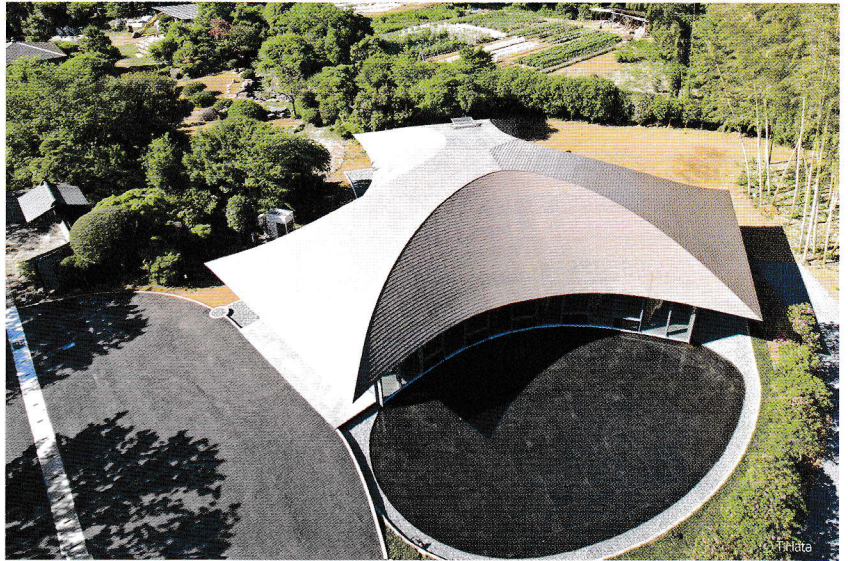
芦原義信賞（新人賞）

「梅郷礼拝堂」

作者：加藤詞史  
所在地：千葉県野田市大殿井 220-11



（撮影 加藤詞史）

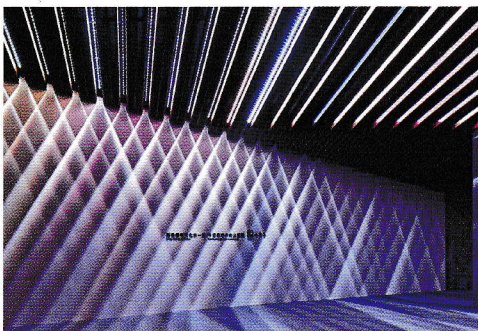


（撮影：彰国社）

30 周年記念 美術工芸賞

「越後妻有文化ホール・十日町中央公民館（光織り）」

作者：高橋匡太  
所在地：新潟県十日町市本町一丁目上 508-2



（撮影 北田英治）

## ● AACA 賞 出島表門橋

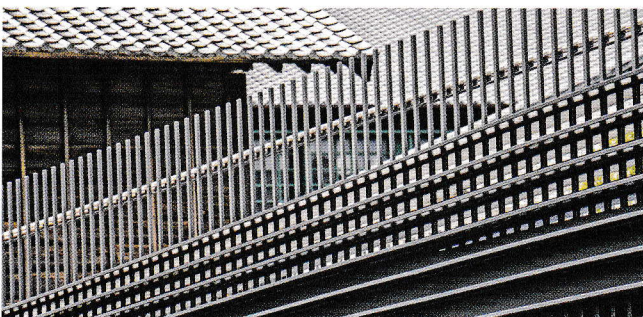
株式会社ネイ & パートナーズジャパン 代表取締役  
日本建築美術工芸協会会員

渡邊 竜一



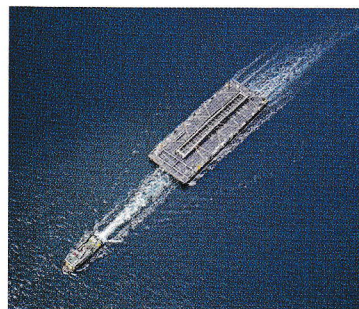
民地も公地も昔は境はなく、同じ素材が地続きだった。小さいころ、原っぱが好きだった。機能は限定されず発見できたし、草むらと地続きで、緩やかに自然に接続している感じがした。機能は緩やかな領域から特定できたし、草むらに入れば、自然と戯れることができた。そこに自由を感じていた。建築を学んで、敷地という領域に縛られることに違和感を感じ、その周辺にある環境のようなものに興味が移行していった。しかし離れれば離れるほど、建築行為のもつ圧倒的な力に魅了されていくことになる。土木という機能が単純な世界であるがゆえに、純粋な構築に注力する必要があったからかもしれない。もしくは機能や分割から生まれた余白に魅了されていたのかもしれない。近代は機能分化の歴史。細かく分割された要素から世界を理解しようとした。しかしものごとは多面的で両義的でもある。機能や問題解決、論理的理解、合意形成という断片の積み重ねには限界がある。出島表門橋は、400年という歴史の風景に、現代の全く新しい橋を、祝祭性を持たせて架橋した。小手先の説明や合意形成は通用しないし、歴史の時間、長崎の人々の風景に接続する必要があった。

長崎市が進める出島復元整備事業の中で、橋長4.5mのかつての石橋の復元ではなく、現代の橋を設計して架けたのが出島表門橋である。史跡及び遺構を保護するという条件や、河川景観への配慮や水害のあった地域（長崎大水害）であったことから、河川内に橋脚を設けないというコンセプトをもうけ、力をバランスさせ片側で33.3mを支えるという長崎・出島にしかないユニークな橋を実現した。更に、この橋を市民と共に架けるため、市民を巻き込んだコミュニケーションを継続して実施しながら、設計～運搬～架橋～完成までの一連のプロセスをデザイン。延べ5000人を越える市民が見守る中、橋の架橋を街の祭りごととして成立させた。完成後も2週間に一度市民がメンテナンスする活動を継続し、街の資源として橋への愛着醸成へつなげている。

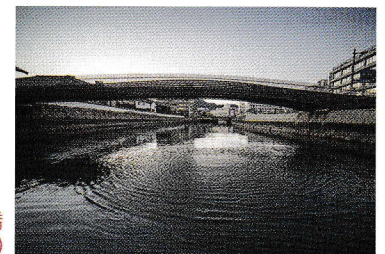


歴史と対話するディテール（撮影：momoko japan）

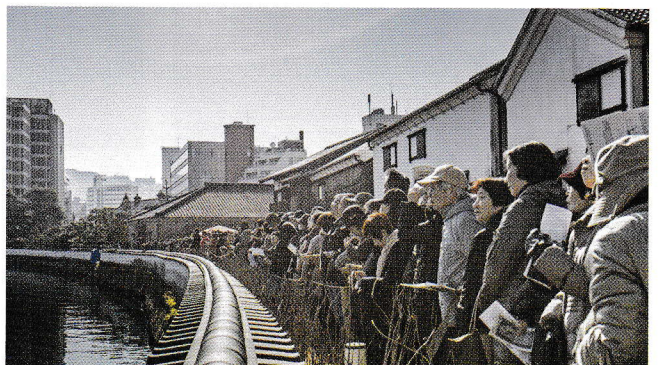
時代を超える部分は、予定していた要求されていた機能の外にあると考えている。機能は時代に依存する。技術も時代に依存する。遺跡が放つ魅力は、本来の機能ではなく、技術の痕跡と人が思考し生み出した気概から生まれるのではないか。その時代の課題解決だけでは不十分なのである。言語化しずらく多次元な情緒、合理的理解の外であることが必要だった。出島表門橋のディテールや一括での運搬、架設には、論理だけでは説明しきれない部分がある。物質としての存在感を持ちつつ、風景に融解していく相反する様もそうである。また出島表門橋は、モノとコトの両側面がある。しかし、実は建築行為が持つ祝祭性を考えたとき、この二つはひとつながりなのかもしれないと気づいた。そして4年半という時間が積層され、架橋後の今も継続している。表門橋は、建築でも土木でもなく、どちらでもある。領域の越境ではなく、緩やかな連続として様々な事象を融解していきたいと考えている。



台船での運搬  
（撮影：noriyuki yamagashira）



風景に融解する橋  
（撮影：noriyuki yamagashira）



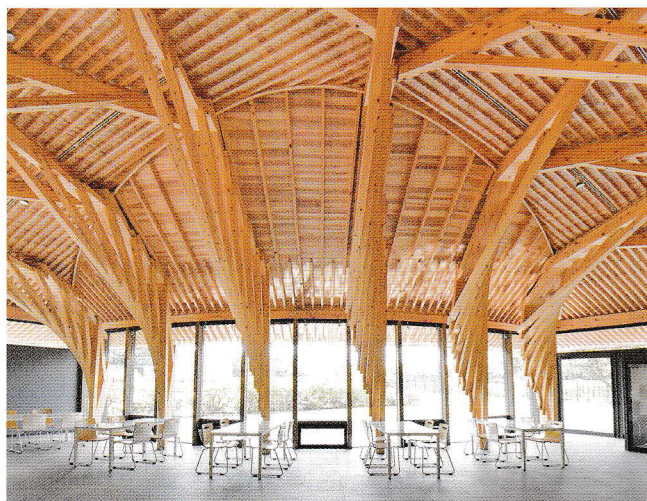
市民数千人が集まった一括架設（撮影：noriyuki yamagashira）

● 芦原義信賞（新人賞）

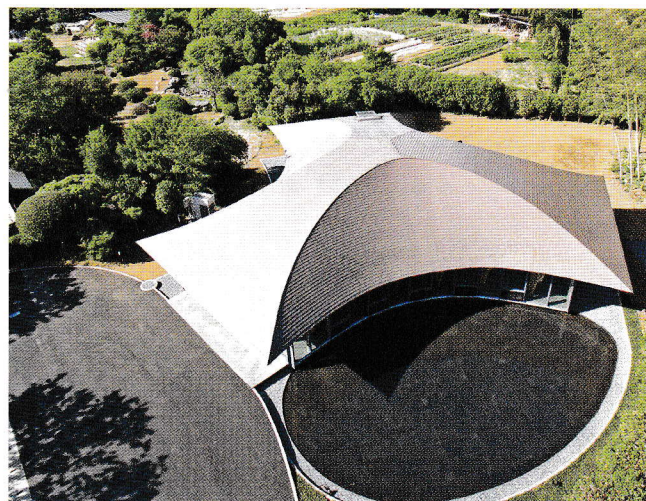
梅郷礼拝堂

加藤建築設計事務所主宰  
日本建築美術工芸協会会員

加藤詞史



相持ち構成の6組の組柱



三方向へ広がる屋根を俯瞰

木質空間のデザインとこれから

■ 木造3階火災実験から木質技術の「今まで」

木質構造とそのデザインに本格的に取り組んだのは「白鳥新駅プロポーザル（次点/2010）」で提案した屋根が最初のプロジェクトでした。その後、国土交通省との共同で行われた「木造3階建て学校の火災実験」に参画。部材単位の性質と、それが集積してひとつの建築となった際の性状を、足し算で単純に予測出来ない難しさに、木質ならではのものを学びました。

一般的には、「太い」「長い」材を得られる大断面集成材やLVLなどの接着系木質材料を使うと、大空間を解きやすくなりますが、設備の整った一部メーカーからしか材料が調達できなくなるなどの課題もあり、もっと汎用性がある、工夫の余地もある一般製材の活用を条件として、次の「梅郷礼拝堂」に取り組んだわけです。

■ 梅郷礼拝堂と製材の「いま」

戸建住宅用の柱材として生産される一般製材は、3.5寸や4寸正角材で、流通量も多く地域を問わず入手でき良質なものを調達しやすい。この汎用性のある柱用正角材を用いて、特徴的な曲面屋根と120度点对称形プランを持ち、かたちが連続的に変化していく内部空間をつくるための構造を、いかにシステム化するかを課題としました。ともすると立体的な接合が発生し複雑な加工や組み立てが発生しがちなデザインに対して、正角材を単純なルールによって動かすだけで曲面にフィットできるような組柱を離散的に配置し、2次的な屋根構面で包括するシンプルな方法に到達したわけです。モノの成り立ちに関わるテクニク（結構的）

で、オーナメンタル（装飾的）な様相となった様に思います。

また、今回の折りの空間にとっては、建物の永続性が重要であると考えました。それは（1）親しみや愛着を醸成するデザインと（2）経年変化と耐久性に配慮した構造の、2つの面で、長持ちすることです。建物全体をレシプロ（相持ち）とし、接合方法を、木と木を切削し組み合わせ、力をダイレクトに伝達、木材の繊維方向に支圧力を伝え、経年変化によるガタも生じにくく、荷重に対しても変形しにくい仕組みとしています。このがっちり組み合わせ、仕組みが感じられるデザインが、人々の信頼感や、愛着を支えていくのだと考えています。

■ 木質デザインの「これから」

木質化への流れは、グローバル化における文化的均質化に対するひとつの表れとも言えるのではないのでしょうか。今後も様々な技術が、木材料を工学的に、また安定的な使用を実現して行くと思います。その中で、地域由来（日本固有）の風土を引き受けていくようなデザイン、木の使い方が求められていくのではないかと考えています。

仕組みや成り立ちが感じられるデザインに日本的な感性の一端があるのではないかと考えています。

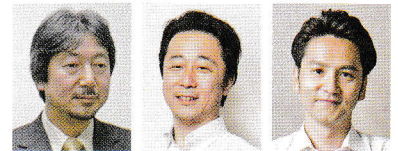
建物は、応永2年（1395年）野田市内に創建された寺院の「別院」で、廃寺となった寺院の再興計画。計画地は、決して魅力的な場所ではありませんでしたが、竹林や日本庭園など、小さな手がかりから敷地を持つ歴史や特性を最大限に引き継ぎ、場所を書き換え、新たな価値を見出す計画としました。宗派を問わない新しい考え方を、旧来の軸性の強い宗教空間を踏襲するのではなく、人々と空気が双方向に行き交う流動的な構成を持ち、3つの環境要素（竹林、日本庭園、池）に沿う柔らかな曲線で囲まれた3角形状のプランとして実現しています。

● AACA 賞 優秀賞

# 越後妻有文化ホール・十日町市中央公民館「段十ろう」

株式会社 梓設計 常務執行役員  
日本建築美術工芸協会法人会員  
鈴木スタジオリーダー  
鈴木スタジオ 主任

永池雅人  
鈴木教久  
加藤洋平



越後妻有文化ホール・十日町市中央公民館には「段十ろう」というちょっと変わった名前がついている。十日町の公共施設には皆独特の名前がついており、この「段十ろう」は中心市街地の南の拠点として、北の拠点、越後妻有里山現代美術館「キナレ」と対を成し、その間に点在する市民活動センター「十じろう」、市民交流センター「分じろう」などと一体となって、中心市街地の活性化をけん引する役割が期待されている。

今回敷地となった十日町は、雪まつりでも有名な大変な豪雪地帯で、冬には3メートルを超える雪がまちをすっぽりと覆ってしまう。この雪に対して建物をどうデザインするかということが、今回設計にあたっての大きなテーマとなった。その課題に対し我々は、大屋根と雁木という2つの回答を用意した。建物をひとつながりに覆う大屋根は、3mを超える雪をしっかりと受け止め、その姿はあたかも雪まつりの雪像のように、十日町の冬の景観を演出することを意図した。もう一つ、建物前面に設けた100mを超える雁木は、人々を迎え入れるように両腕を伸ばして伸びやかな表情を作り出し、これを支える壁柱は歩く人に軽やかなリズムを与える。雁木の奥にはこれと並行して雁木ギャラリーを設け、市民の手による作品が、外に向けて賑わいの表情を演出すると共に、南北2つの入り口を繋ぐ回廊としての役割も果たしている。

エントランスを入ると、この建物の中心となる「だんだんテラス」が迎えてくれる。今回の敷地は東側と西側で約1層分の段差があり、この段差を利用して階段状のスペース

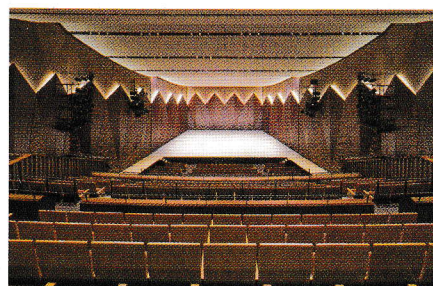
を設けている。「だんだん」とは文字通り階段状の形状も意味しているが、十日町のあいさつの言葉「だんだんどうも」にも由来している。ここは日常的な市民の憩いの場になるとともに、様々な市民活動の発表の場ともなる。また正面のリハーサル室の壁を開けると、リハーサル室を舞台とした客席へと早変わりし、小ホールやオープンステージとしても機能する。一方ホールの内部は、十日町の国宝である「火焰型土器」をモチーフとしたデザインとしながら、木で覆われたぬくもりのある空間としている。

ところで十日町というと、もう一つ皆さんが思い浮かべるものとして大地の芸術祭があるのではないだろうか。今回の建物はこの大地の芸術祭に参加する作品として計画している。そういう意味では建物そのもののデザイン性もさることながら、実際に内外の作家とのコラボレーションも積極的に行っている。一つはポルトガルの作家であるジョゼ・デ・ギマランイス氏による緞帳と彫刻で、この彫刻は敷地の入り口で来館者を迎えてくれる。ただ緞帳については、我々としては舞台芸術を邪魔しないようもう少し無地に近いものを想定していたが、結果としてかなりポップなデザインとなった。

もう一つは高橋匡太氏による「光織り」である。これは光による雁木の演出で、時間ごと、そして季節ごとに移ろう様々な表情を見せてくれる。この建物と芸術のコラボレーションは、十日町の夜を華やかに彩ると共に、冬にはさらに雪を味方につけて最高のパフォーマンスを見せてくれる。



越後妻有文化ホール・十日町市中央公民館「段十ろう」



越後妻有文化ホール



だんだんテラス

# ● AACA 賞 奨励賞 川崎技術開発センター



株式会社三菱地所設計  
大森 晃

本建物は医療、産業、学術等で使われるアイソトープの利用や測定に関する研究開発施設である。敷地はライフサイエンス系の研究施設の集積を目指す再開発地区内に位置し、多摩川や羽田空港に面した立地である。

本施設の設計にあたり、三つのテーマを設定した。

## ①再開発地区の景観形成

地区内には空港の航空規制で高さを抑えられたために背後の街並みを塞ぐような建築や、川沿いでありながら対岸からの景観への関心が薄い建築が建ち始めていた。今後、形成されてゆく地区の景観への貢献をテーマとした。

## ②斜面地における外部環境の取り込み

敷地は川沿いが3mも高くなる斜面堤防として整備され、道路からは川や空港の広がりある景観が望めなかったが、この優れた外部環境の取り込みをテーマとした。

## ③無窓建築の在り方

アイソトープから放出される放射線の遮蔽及び構造・セキュリティ強化のため無窓建築が求められた。室内の快適性と無窓建築のもつ外観の違和感の排除をテーマとした。

上記テーマをもとに以下のように設計をおこなった。

### Ⓐ敷地を貫く視線軸とボリューム分節

道路から川まで貫く軸線を設定し、軸線上の部位はガラスエントランスとした。透明な空間は、対岸から本建物の背後を見通せる窓としても機能し、閉鎖的な地区景観の改善に向けた嚆矢となるよう計画した。

単調な箱状建築を避けるため、必要諸室を4グループに分節し、最適化された容積（平面×階高）を与え、各ボリュームがリズムカルに連なる特徴ある形態とした。

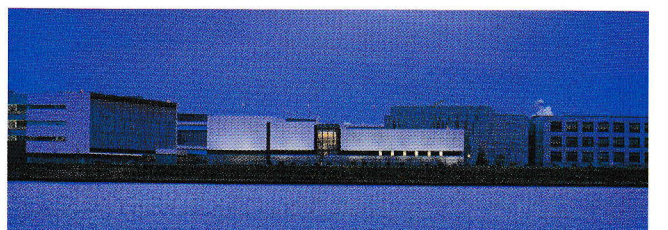
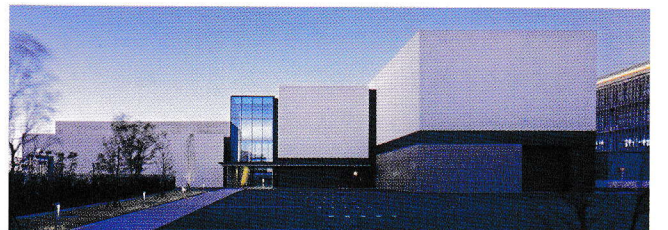
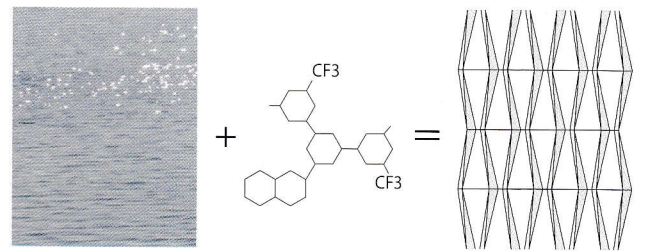
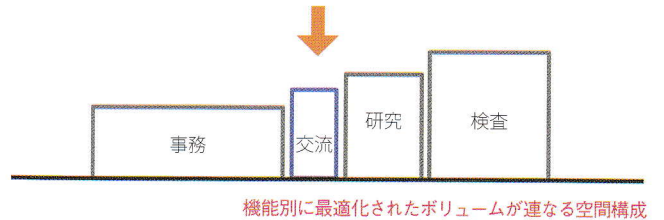
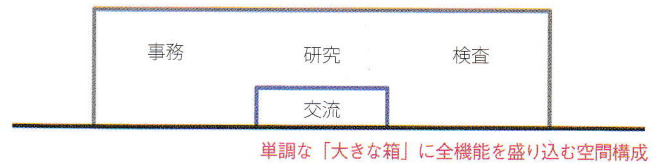
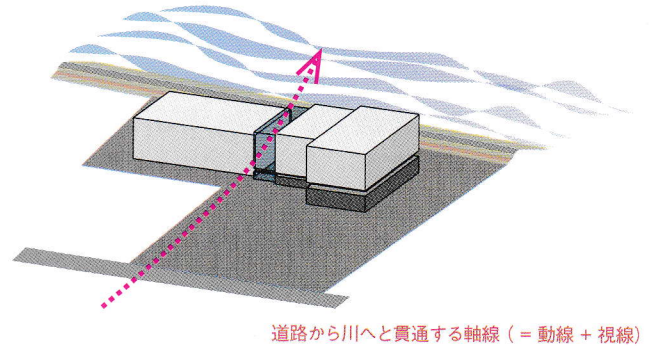
### Ⓑ対岸の川に向かい上昇する動線

アプローチを緩やかに上昇させ、対岸の景色が徐々に視野に入ってくる効果を狙った。エントランス空間も2層構成とすることで、職員が通勤、休憩、移動する際に、川や空港の広がりある景色を楽しめるよう配慮した。

### Ⓒ大きなキャンバスと見立てた外壁

無窓建築のもつ大きな外壁に対し「アイソトープ×分子記号」、「多摩川×水面の揺らぎ」から連想した多面形状を刻みこむことで、建築にスケールを測るための手掛かりを与えるとともに、季節や時刻で移ろう光と影が外観に多様な表情をもたらすことを意図した。

竣工後、施主から本建物を美術館と認識される方がいるとのコメントをいただき、街を拒絶する施設ではなく、街に受け入れられる建築を実現できたことを喜んでいる。



(撮影：FOTOTECA)

## ● AACA 賞 奨励賞 伊根の舟屋

京谷建築設計室 代表

京谷友也



「伊根の舟家」は京都府北部、伝統的建造物群保存地区に指定された伊根浦の、数百棟の舟屋が立ち並ぶ一画にあります。一軒の舟屋を宿として再生しました。

生活の営みや生業が形をなし、さらに群としてひとつの街や集落として立ち現れる。それが「景観」であると考えています。舟屋は元来漁師の作業場です。母屋で寝起きし、舟屋で漁の準備をし、そこから海へと出てゆきます。それが、舟屋を核にした伊根の景観です。つまりこの改修対象の舟屋は、すでにその本質的な存在価値を失っていました。しかし、時の流れにあらがいがながらもこの建物を舟屋として存在し続けさせるには、そこに新たな舟屋性を埋め込むほかに方法はないと考えました。

極言すると舟屋は、漁師が陸と海とを行き来する往還運動の境界装置でした。改修対象の舟屋に刻まれた度重なる改修の痕跡は、この空間的な運動を滞らせていました。そこでまずは、陸から海、海から陸へとうつろう流れを諸々の建築的操作によってなめらかにし、かつドラマティックに演出することにしました。そして「舟屋」というからにはまず舟がなければ始まりません。ところが敷地の水際には堤防が築かれ、舟はすでに入りにくい状況でした。そんなところへ舟を置いてみたところで舟屋は無用の長物です。この場合、湯舟を置けばいいでしょう。かつて舟が納められていた海側の一画に風呂を据え付けました。

ところで、建築の実務においてはあたり前のことではありますが、改修に際しては数々の法的、思想的な困難と矛盾を伴いました。

白木や焼き杉が近代の舟屋における標準的な仕上げであることは、現存する舟屋群を眺めてみれば疑う余地もないわけですが、景観条例を運用する教育委員会では木部の塗装の品番までも指定し、指導しています。首をかしげずにはいられない景観保全の運用状況ではありますが、まずはそれに従いながらも、しかるべきときには誤りを指摘していかなければなりません。

ともあれ、最大の課題は、バリアフリー化の条例と、外観を変更してはいけないという条例との間に生じる矛盾でした。前面道路と既存の床レベルとの間には1m近い落差があったのですが、敷地に余裕がないために、スロープだけでこのレベル差を解消することは物理的に不可能でした。そこで建物を持ち上げて道路とすりあわせることを考えましたが、教育委員会から待たがかかりました。高さ方向に1mもの高さ方向の変更を伴うめんよう（ジャッキ

アップ）による改修は、「外観上の大きな変更」とみなさざるを得ない、とのことでした。妥協案として、後世の増築と思われる部分を破壊し、敷地に残されたわずかな隙間に法規上許される最大限の傾斜路を設け、めんようの量を最小限に抑えることで打開策としました。

黄色い点字誘導ブロックも、大きな課題でした。「伝統的景観」を保存しようとしている場所に、目立つことを目的にしたものを設置することは、多様な人々が暮らしやすい社会を実現するという美辞麗句を鑑みたところで、安易に容認できるものではないでしょう。条例をどう拡大解釈してみたところで解決策をみつけだすことはできなかったもので、当局に上申書を提出し、代替措置を講じることで点字ブロックを特例的に設置しないことを認めて頂きました。諸々の矛盾を、時に、関係者からの忖度を引き出すという超法規的な手段を用いつつ、解決していったわけです。

法律や条例に素直にしたい、事を荒立てる必要もありませんが、それだけで良い社会が実現されるとも到底思えません。諸々の制度や価値観を無条件に受け入れるのではなく、合理的、倫理的、総合的に物事や歴史を再構築することで、社会に能動的に関わっていく態度こそが、建築家の使命と責任である、と考えています。



伊根湾より

(撮影：牛久保賢二)



湾を臨む

(撮影：牛久保賢二)



## ● AACA 賞 特別賞 薬師寺 食堂

竹中工務店 大阪本店 設計部 部長  
日本建築美術工芸協会 法人会員

野田隆史

薬師寺食堂は法相宗大本山薬師寺の白鳳伽藍の復興事業として計画された仏堂である。

薬師寺の創建は白鳳時代であるが、創建時の建物は国宝である東塔を除くすべてが、長い歴史の中で数々の天災や人災により、失われている。

創建当時の伽藍配置は、古文書などの史料や近年の発掘調査によりその内容が明らかになってきている。南北の軸線上に、南から佛を祀る「金堂」、法を示し研鑽する「大講堂」、そして僧が一同に会して食事をとる「食堂」が配置され、伽藍の主軸を構成し、金堂の南側に東塔・西塔が配されている。昭和40年代から始まった白鳳伽藍の復興事業により、昭和51(1976)年に金堂、平成15(2003)年に大講堂が復元され、平成29(2017)年に残る食堂が復元されたことで佛・法・僧の三宝が全てそろい、白鳳伽藍の主要堂塔の復興が全て完成した。

食堂の設計は元奈良国立文化財研究所所長の鈴木嘉吉先生の監修のもと、復元基本設計を文化財保存計画協会、内部基本設計を伊東豊雄建築設計事務所、構造・設備設計および実施設計を竹中工務店設計部が担当した。

復元設計は発掘調査結果や史料に基づき創建時の姿を明らかにし、外観はそれを忠実に再現した。一方内部は参拝、法要、法話、写経などいろいろな宗教活動に活用できるように、入側柱を抜いた大空間の構築をめざした。その手法として、構造は鉄骨造を採用、復元された木造部分は化粧材という扱いをしている。朱塗りと白壁の伝統的な建築空間

の中に、日本画家の田淵俊夫氏の筆による本尊の「阿弥陀三尊浄土図」および全長約50mに渡る14面の壁画（「仏教伝来の道と薬師寺」）が祀られ、本尊の光背から黄金色に染められたアルミの化粧天井が雲のように広がり浮遊する。本尊上部の天蓋は文化財の彩色を数多く手掛ける川面美術研究所により、伝統的な手法と素材で彩色された。また多様な宗教シーンの空間演出に対応すると同時に仏画を切り取るように照らし出す特殊な照明はライトデザインの協力を得て実現した。このように様々な分野が協力することによって、これまでの寺院建築にはない伝統と現代が融合された新しい宗教空間、芸術空間を創造した。

そのような芸術性、空間性が評価された一方で、復元でありながら、本来木造であれば必要な入側柱を抜いて、大空間を創り出したことに対しては、現地審査でも公開審査でも一部の選考委員の方から批判的な意見が出された。「木造に見える鉄骨造」が建築のあり方としてどうか、ということである。入側柱を残して木造とすべきではなかったか、という意見もいただいた。

しかし建築主、監修者も含めて設計チームには鉄骨造を採用することに対して当初から否定的な考えはなかった。むしろこの建築が単なる過去の建築の復元ではなく、歴史に敬意を払いながらも現代の技術によって、伝統的な意匠と現代の新しい空間を実現できた貴重な事例であると自負している。伝統はいつもその時代の新しい技術によって生まれるのである。



東側から見る外観 左の建物は大講堂



食堂内部 中央に祀られるのは本尊である「阿弥陀三尊浄土図」

# 飯野毅一会員におききする

## 広報委員会

日本建築美術工芸協会設立時からの会員で、平成30年度設立30周年特別記念会に於いて特別功労者表彰を受けられた飯野毅一会員からお話を伺いました。飯野会員は、1969年4月、31才の時に商社を退職され、奥様のお父様である梅田画廊の土井憲治社長が1967年3月に創設された株式会社現代彫刻センターの代表取締役役に就任されました。そしてロダン以降に発展を遂げた近代から現代に至る彫刻芸術の普及啓蒙を主たる目標として本格的な活動を始められましたが、活動の中心は、彫刻作品の展覧会の開催であり、東京・京都など一部の地域に限られていた彫刻作品の鑑賞の機会を全国規模で展開していかれました。また、各地の美術館や主要な百貨店に於いても大規模な企画展を数多く開催され、内外の代表的な彫刻家の作品を順次紹介する事業を続けてこられました。

現代彫刻センターでは、創設後間もなく、欧米の彫刻家や美術館やその関係者との緊密な関係を築くために、ローマ、パリ、ニューヨークに駐在員事務所を開設し、駐在員の配置によって海外の彫刻家の企画展開催をより容易なものにしたのみならず、欧米の美術界からも厚い信頼を得て、多くの友好関係を深めていかれました。

そして、公共空間への彫刻設置が時代の要請となってきました。現代彫刻センターが協力された、仙台における「彫刻のあるまちづくり事業」を起点として、従来の選ばれた彫刻作品を公共空間に設置するのではなく、選ばれた作家が作品を与えられた景観や環境に合わせて制作する形式がより多く取り入れられる様になり、特に建築との関りの中で取り入れられるアートワークは建築家との共同作業の下に、設計段階から建築空間に相応しい作家の選定が行われ、制作設置されるのが一般的になっていきました。現代彫刻センターは、全国の美術館を含む自治体や企業からの要請に応じて、優れた彫刻作品を公共空間に常設置する業務を続けてこられました。手掛けた公共彫刻は500件以上にのぼるそうです。

また、建築界からの要請で大型のプロジェクトにより誕生する公共的な建築空間への彫刻をはじめとする様々なアートワークの設置も現代彫刻センターの大きな役割となっていきました。本号の表紙を飾る東京芸術劇場の広場に設置されたアート作品にも飯野会員が大きく関わられています。

—aaca入会の経緯、そしてaacaでの思い出などを伺いました。

50歳の時かな。日本建築美術工芸協会の第一回理事会に芦原義信先生から「君、ちょっと一緒に行ってくれよ」と連れていかれ、いきなり理事会に出され、そのまま理事になってしまいました。芦原さんらしいでしょう。

協会主催の旅行会には、芦原先生をはじめ、皆さん奥様同伴で参加され、東北、沖縄や天橋立、徳島の阿波踊りにも出かけたことがあります。以前行われた設立記念会では、建築会館の広場で阿波踊りをやったことも懐かしい思い出です。また、当時から会員増強が大事なお仕事で澄川（喜一）さんや加藤（貞雄）さん、岡本会長もお誘いをして協会にご入会を戴きました。岡本会長は頑張っているらしいですね。色々な企画を提案されたり、30周年記念事業もよかったですね。

—現代彫刻センターは、公共空間へのアートワークの仕事、美術館やデパートなど260会場にも及ぶ展覧会の開催などを続け、2002年12月に35年におよぶ活動にピリオドが打たれましたが、センターでのお仕事について伺いました。

（35年間に及ぶ活動は、2014年《現代彫刻センターの記録》としてご自身により編集・発行されました。）

日本全国に公共彫刻があり、（ご自宅のある）横浜には、横浜ベイシェラトンホテル前にエミリオ・グレコの《水浴の女》、横浜高島屋デパート屋上にあるジョイナスの森彫刻公園には、ブルデルやマンズーなどたくさんの彫刻が置かれています。

1983年に出版された《世界の広場と彫刻》は、私がやってきた仕事のモニュメントだと思っています。当時45歳くらいでしたが《世界の広場と彫刻》は、芦原義信先生、横文彦先生、佐藤忠良先生、辻井喬先生など、そうそうたる編集陣でした。また作品の写真は、村井修氏が2回に分けて世界中を回って写真撮影をされ、旅行の実費だけで引き受けてくださいました。序文はヘンリー・ムアにお書き戴きました。本のタイトルが「世界の彫刻」に「広場」が入ったのは横文彦先生が「広場というのは大切だよ」と言われ、広場に置かれる彫刻というコンセプトでこの本をつくらうということになりました。また編集陣のおひとりである三木多聞先生は、「美術館に置かれた彫刻は見る対象であるが、公共空間に置かれた彫刻は一瞥の繰り返しで、何度も行き交ううちに空間が豊かになる」と語られていました。

《世界の広場と彫刻》取材のために世界各地を訪れたが、この本を出すというだけで各地で厚遇を受けました。ある時はワシントンのナショナル・ギャラリーのカーター・ブラウン館長とパリで会食の機会があり、その折、この本のためにワシントンに調査に行くんだとお話したら、カーター・ブラウンから、会いたい人は誰と誰なんだ、いつ来るか連絡しろと言われた。ワシントンのナショナル・ギャラリーへ行き、円卓の大きな会議室に案内されると、建築家協会や美術関係者など会いたい人が全部集まっていて驚いた。文化・芸術に対する意識が日本と全然違うことを強く感じた。

出版は、芦原先生のご紹介で中央公論に持ち込んだところ、100周年記念事業として出版してくれた。芦原先生のお力だと思います。3000冊しかつくりなかつたが、1983年第37回毎日出版文化賞特別賞を受賞することができました。亀倉雄策氏が構成造本を手掛けられ、人に恵まれた思い出がいっぱいつまった本です。

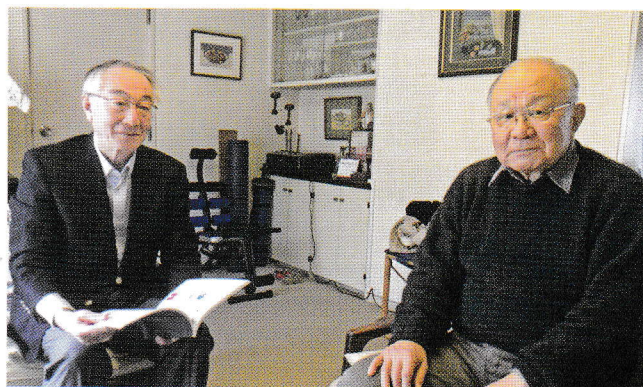
—芦原義信先生について思い出を伺いました。

あの忙しい芦原先生がよくあれだけの本を書かれたと感服しています。特に、酒井忠康先生（世田谷美術館館長）が「私のバイブルだよ」と私に言った『街並みの美学』は『隠れた秩序』と併せてaacaの方々には必読の本だと思います。

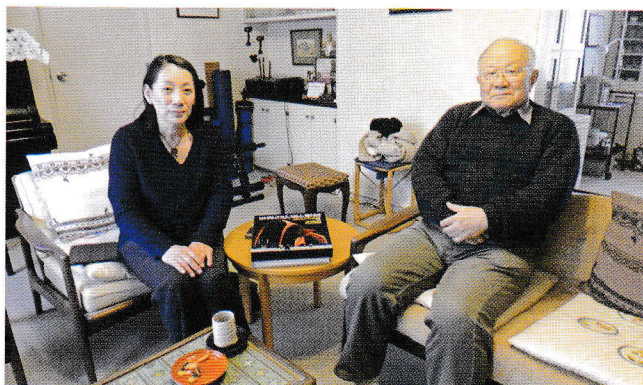
芦原義信先生が設計された東京芸術劇場のアートワークには最初から参加しました。広場にポールの上に乗った二つの彫刻のグループがあるが、ポールを使うという考えは、芦原先生の発想です。面白いなと思った。(p20、21に会報6号の記事を転載)

aacaの仕事について芦原先生が「建築、美術、工芸の人たちが業種が違って仲良くしてもらうこと、そうすると結果として、いい空間ができる。いい空間というのは公共空間なんですね。つまりものじゃないスペースをどう豊かにするかということがaacaの仕事だ」とよく言われていたが、そのためには関係する人たちがお互いに仲良くなって、輪を広げていくことが大切で、現代彫刻センターの仕事は、そういう意味があったと思っています。

(構成 野口真理・飯田郷介)



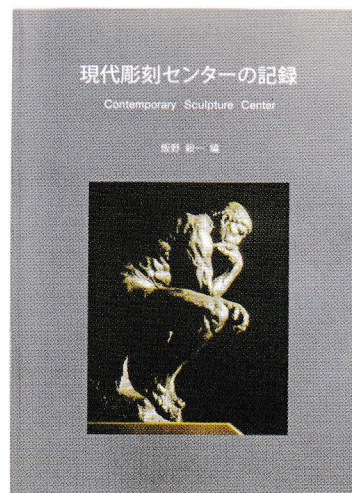
飯野氏（右）と聞き手の飯田広報委員



飯野氏（右）と聞き手の野口広報委員



『世界の広場と彫刻』1983年、中央公論社刊



『現代彫刻センターの記録』飯野毅一編



KIICHI INO  
**飯野 毅 一**  
 東京都中央区銀座3-10-19 美術家会館1F  
 現代彫刻センター TEL.03-3542-7505

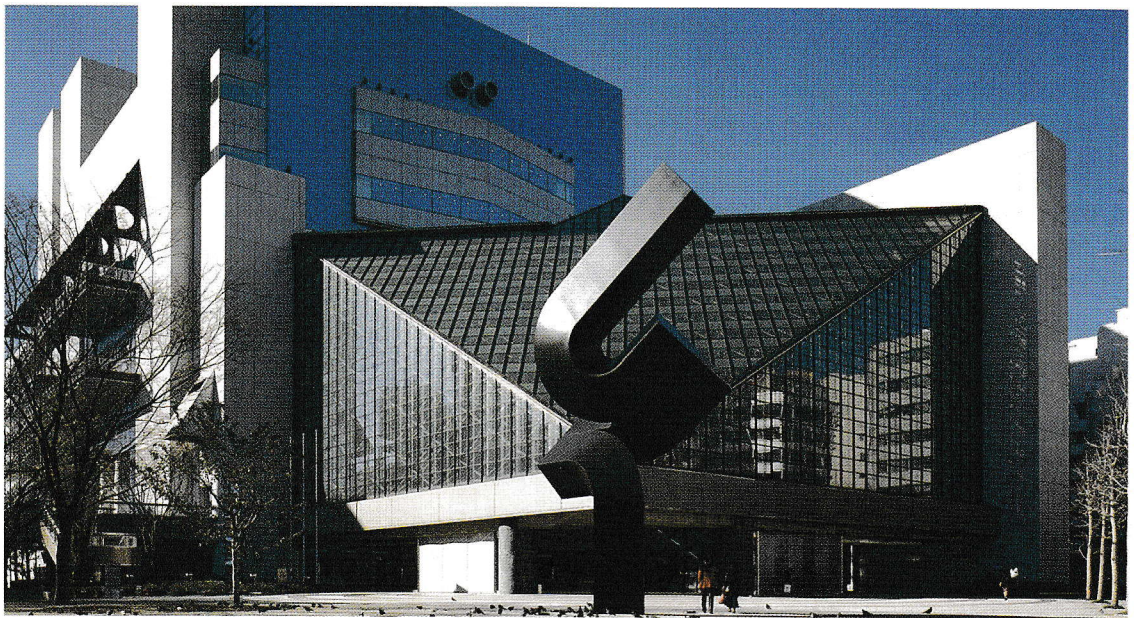
東京芸術劇場の設計計画に、過去に例を見ない程の多数の美術家、工芸家の参加を得たことの意義は誠に大きいものがあります。

それは、この東京芸術劇場が建物や構

造物、或いはその機能性といった側面に必ずしもとられることなく、文化活動の拠点として、正しく人々に解放された心豊かな共有空間の創造というトータルな見地から計画され実践された結果と考

え得るからであります。

私共の担当は、劇場正面入口前に広がる西口公園の中にシンボルとして設置される大型彫刻、そして10本と日本の2つのグループに分けられたステンレス・パ



ミードモア 撮影：村井 修



石彫 右から若林 功・斎藤 智・岡本敦生・山崎隆・湯村 光・菅原二郎・中井延也・高田大

イブの上に設置される彫刻群の企画制作でありました。いずれも劇場建物と一体となった都民の共有空間を創造することの見地から極めて重要な位置を占めております。従って作家の選定と制作発注に当たっては、芸術性はもとより環境性や市民性といった様々な条件を考慮しながら、都当局、豊島区当局、並びに芦原建築設計研究所の御指導を仰ぎつつ、鋭意慎重に行われたことは申すまでもありません。

## 1. 「CRESCENDO」

(音楽用語で、次第に強くなること)

ペイントド・アルミニウム

高さ10m

クレメント・ミードモア氏制作

東京芸術劇場のシンボルとなる大型彫刻については、何よりも巨大な劇場建物と一体感を成す存在としてスケール感のある力強い作品が求められました。その結果、欧米において数多くの優れた野外彫刻の実績を持つ、アメリカのクレメント・ミードモア氏が選ばれました。作品の設置完了まで、ミードモア氏は数度にわたり来日、その間、主に劇場建物との相対関係を考慮に入れた3つの作品モデルが制作され、作品の方向・角度やスケールの決定まで、現場での検討作業が関係者を含めて幾度か行われ、「CRESCENDO」が我国初のミードモア作品として最終決定を見るに至りました。作品制作はニューヨークで行われましたが、作品設置に係わる綿密な打ち合わせが日米の関係者間で行われた結果、設置作業も略々順調に完了することが出来ました。

## 2. 「田園交響楽」

ブロンズ

地面より高さ 3.35m—6.5m

加藤昭男氏、掛井五郎氏制作

劇場建物に至る西口公園の導入部に10本のステンレス・パイプを点在させ、その各々の上にいわゆる半具象の楽しい彫刻作品をひとつのグループとして複数の彫刻家に制作を願うという前提で作業が開始されました。

作家の選定からパイプの高さや太さ、そして作品の配置や方向等、ひとつの望ましい結果を得る為に、可成り実験的な要素を含んだ企画と思われました。

幸いに、お互い息の合った新制作協会の加藤、掛井の両氏がこの難題に快く取り組んで下さることとなり、関係者一堂に依る度重なる協議の中から、この場所の作品に相応しい「田園交響楽」というテーマも決定されました。お二人の彫刻家が5点ずつ制作されることになりましたが、10点の作品の各々の相関関係や大きさの決定等、正に息の合った作家同志ならではの制作が続けられ、同時に作品の空中への配置に係わる検討も重ねられました。然しながら光線の加減や視点の動線など、どうしても机上の作業では限界があり、最終的には現場に作品を持ち込んでの実験作業となりました。各々完結した複数の作品を空中に然るべく点在させて、全体としてひとつのテーマを表現させるというこの企画の難しさを加藤、掛井両氏の多大な御尽力を得てなんとか克服、無事に設置を完了する事が出来ました。

## 3. 「石彫の道」(仮称)

御影石

地面より高さ 2.05m—3.03m

岡本敦生、斎藤智、菅原二郎、高田大、山崎隆、中井延也、湯村光、若林功

(五十音順) 各氏制作

西口公園の南側、木立の中の遊歩道に

沿って並ぶ平均1.8m程の日本のステンレス・パイプの上に設置される彫刻作品群は、「田園交響楽」がいわば動的存在であるのに対して、未来に向かう悠々の示す静的存在として検討して行くことから始められました。

先ず、作品の素材を御影石とする方針が決定され、内外の彫刻界で活躍中の30代から50代の日本人中堅作家の中から、各々が異なった芸術表現をされる8名の彫刻家が選定されました。

そして、作品の重量の上限を300kgとする前提条件のみで、各作家に自由に制作願うべく、先ずはデッサンを御提出願いました。こちらは特定のテーマは設けず、完全に競作という形式になりましたが、幸いに何れのデッサンも関係者の御期待に十分に応え得るものであり、順調に制作が開始されることになりました。日本のステンレス・パイプは一列に並んでおり、作品もほとんどがいわゆる抽象形態でありましたので、設置に際しては作品同士の個性がお互いに有効に発揮されることに主眼を置き、保全面に配慮しつつこちらも無事に設置を完了する事が出来ました。

周囲への力強い問いかけを意図した作品「CRESCENDO」、楽しみや喜びを謳った「田園交響楽」、悠々の時を静かに語る石彫群、その何れもが劇場建物や他の多くの美術作品や工芸作品と一体となって都民の為の快適で愉快な共有空間の創造の為に資することを願わずにはいられません。



加藤昭男・掛井五郎 撮影：村井 修

## 会員活動レポート

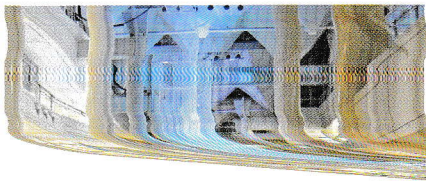
# 今振り返る -仕事・アートと趣味…そして-

Atelier K (アトリエ・ケイ一級建築士事務所) 代表  
(元 (株) 三菱地所設計 常務執行役員)  
日本建築美術工芸協会会員  
柏尾 栄



私は「外部空間の構成」にあこがれ、大阪から上京して芦原研究室で2年間勉強させていただいた。大学院での芦原先生は、私の浅学のせいかな学術的な手ほどきというよりも、院生を前に未来への希望と挑戦の精神をユーモア交えてお話し下さったことが印象に残っている。まさに「その気にさせる」名人のような先生だった。就職は、不動産会社の設計監理部門を希望して入社した。

会社に入ると仕事は、池袋サンシャインシティでの現場と設計の貴重な体験の後、企画設計業務が永かった。企画から完成まで一連の設計実務をした主なプロジェクトは3つしかない。横浜ランドマークタワー+クイーンズスクエア A 工区 (約10年間)、丸の内 oazo (約6年間)、九州支店での JR 博多シティ (約6年間)である。担当中は目前の目標と課題に無我夢中だったが、今振り返ってみると共通点があることに気づいた。計画の骨格に、周囲の街と接続して建物を通り抜ける、パブリックな貫通通路を抱えることである。横浜は5層吹き抜けのショッピングモール、丸の内は地下鉄駅をつなぐ地下通路の上にアーケード型通路と屋内外の広場、博多は駅前広場間をつなぎ巨大駅ビルを貫通するコンコース空間、と空間の特徴は様々だが「共通するのは」建築物の中に半外部的な通り抜けパブリック空間を導入して、吹き抜け・広場や街並みの要素を配し環境形成することであった。このような仕事に遭遇できたことはまさに幸運であったが、今になって思えば、学生時代のあの先生の教えが少なからず潜在意識に染みこんでいて、影響を受けていたのだと思う。aaca30周年記念誌に、芦原先生が残されたものは、街の人間的なパブリック空間の重要性であったり、外部空間・まちなみの美学についての思考プロセスから刺激される後進や次世代に向けた期待と動機付け、ではないか・・・と芦原太郎さんが書かれている。今、会社での仕事を終えて振り返れば、先生の期待にどの程度応えられたかわからないが、先生から頂いた刺激と動機付けのおかけを頂戴したと感謝している。



アートとのかかわりで最も思い出深いのは「JR 博多シティ タイル画アート」である。千住博さんと水戸岡鋭治さんがアートディレクター、「博多駅のタイル大募集!千住博さんが樹を描きます。あなたは花や鳥などの絵を描いてください」と市民から葉・花・鳥・魚の色紙画を募集し、1階コンコースの柱、3階新改札口空間、9階ホール壁などパブリック空間の主要な壁面・柱を、有田焼の白磁に染付のタイルを使って、都会の森へと演出するプロジェクトであった。我々建物本体設計者は、パブリック空間の中でふさわしい画面を最大限提供し、建築空間との調和や技術的なサポートを行う脇役ではあったが、建築とアートが一体となり、地元の工芸技術と素材を使い、アーティストが構成ディレクションを行って、最終的には28,000枚もの市民参加を募って出来上がった環境アート作品は、とても印象深いものであった。今もHPで応募者の名を入力さえすれば、いつでもその場所と絵が見られる。私のつたないモミジの葉っぱも…。

その博多駅が契機での九州赴任中、趣味を一つ身につけた。立ち寄り温泉巡りだ。週末を待ちかねて、名湯・秘湯を求め車で九州一円を駆け巡り、温泉のはしご入湯。ついでに自然・風物・名所旧跡・美味しい食べ物も味わい、大の九州好きになってしまった。6年間のデータベースの通算入湯回数317湯、入湯温泉数は214湯である。同好の士が多く自慢出来ないが、顧客からは、止まらない話題提供に地元の人より詳しいと喜ばれ、大いに営業に役立った。これも今になって思えば、サウナに魅了された芦原先生との共通点ではないかと勝手に喜んでいる。

そして今、残された貴重な時間は「日々是好日」で、有意義に過ごしてゆきたいと思う毎日…aacaの皆さん、よろしく交流お願いいたします。



JR 博多シティ 3階新改札口 環二

# 「ジャポニスム 2018：響き合う魂」に参加して

日本美術家連盟会員  
ベルギー協会会員  
日本建築美術工芸協会会員  
高橋幸子



日仏国交樹立 160 周年企画「ジャポニスム 2018:響き合う魂」国際交流基金事務局より認定して頂き、2018 年 10 月 5 日（金）- 11 日（木）パリにて個展を開催致しました。

「ジャポニスム 2018：響き合う魂」コンセプト。

奇しくも 2018 年は、20 世紀初頭に駐日フランス大使を務め、劇作家、詩人でもあるポール・クロードルの生誕 150 年です。エッセイ「日本の心を訪れる眼」の中で、日本人は自然の中に人間を超越する崇高なものが宿っていることを感知し、自我を主張するよりもこれらにたいして恭敬の気持ちを持つところが優れた特性で、日本の絵画や文学の中にこの日本人の特性たる「魂のうるおい」が表現されていると語られています。

一世紀以上前に日本の浮世絵の発見が引き起こした美的衝撃と同じように「ジャポニスム 2018」は、現代日本の創造の活力と人を魅了する力を再び証明するでしょう。人を驚かせ絶え間なく伝統を刷新し、新しい世代のアーティスト、デザイナー、建築家、映画人を披露する、これが「ジャポニスム 2018」の目指すところ です。

私はそのような趣旨に賛同し、日本独特の空気感、風、優雅、繊細、自然を敬う精神性をお伝えできるよう念じて、作品制作に努めました。

個展会場はボンビドーセンター国立近代美術館から 1 分の場所にある白い瀟洒な建物で、会場内の飾り棚に仏像が展示されており、地下は座禅道場になっていて、週に何回か座禅が行われていました。

私は以前より慣れ親しみ享受していた、日本の伝統音楽「琴」の繊細な調べを会場に流し、1200 年の歴史を秘めた古都京都の洗練された風景、日本各地の四季折々の美しい風景、百人一

首より抜粋した和歌と十二単「ひとえ」を纏「まと」った女性の姿、伊勢物語作中の抒情的光景など、大小あわせて三十五作品を展示させて頂きました。

10 月 5 日初日夕方よりオープニングパーティーが始まり、現地スタッフのご尽力により、お陰様で大勢のお客様がお越し下さいまして、パーティーはとても盛況で嬉しい限りでした。

オープニングパーティーご出席者の中に、ナポレオン・ボナパルトが制定したフランス最高勲章レジオンドヌール勲章を授与されたお客様がおられました。その方は日本の絵画にとっても御興味をお持ちのご様子で、青藍の背景に蛍が黄色いほのかな明かりを灯し、薄紅色の十二単を纏った女性が虹色の扇子をかざした作品「清少納言」をお求め下さいました。大変有り難く光栄なことで、このような貴重なご縁を賜りました事心より深く感謝申し上げます。他にも日本独特の美しい風景をお気に召して下さいお客様が多くおられ、皆様方との温かい交流はパリ個展の素晴らしい記念となりました。

「ジャポニスム 2018」事務局広報の公式ウェブサイトで、個展会場の様子や作品の紹介をして下さいましたので、ご覧頂いた皆様からの反響が大きく好評で、今後の活動に広がり指針ができ、大変有り難いことで御座いました。

今回のパリ個展に於いて想定外の多くの良い手応えを頂きましたが、このような事は私一人では御座いません、ひとえにご協力、ご支援賜りました皆様方のお陰様と、感謝の気持ちが一杯で心より厚く御礼申し上げます。

今日まで拙い私にお力添えお励まし下さいました多くの方々の為にも、これまで以上の絵が描けるよう、今後も作品制作に努力精進して参りたいと念じております。



「早朝の渡月橋」



「法然院の秋」

# ステンドグラスの本質 パブリックアートとしての側面からの展望

光ステンド工房代表  
展覧会委員会委員長  
日本建築美術工芸協会会員

平山健雄



ステンドグラスにおいて、教会建築特有の聖人や預言者、天使などは、ガラスに絵付けをする伝統的な技術が必要で、日本にはほとんど紹介されてこなかった。そのためこの芸術の草創期である大正中期頃よりアールヌーヴォーやアールデコ様式の絵付け不要な幾何学的模様デザインがステンドグラスに置き換えられ唐様模様や和風の意匠に取り込まれ、独自のスタイルが生まれていった。一方ゴシック前期に頂点を迎えたこの芸術は、フランス13世紀シャルトル大聖堂にその典型を見ることが出来る。南北のパラ窓から差し込む赤系・青系の光は中央の祭壇に集束され、神秘的な光の演出がなされている。この光の空間構成は、ルネサンスや時代を経た現代にまで建築様式の変遷と共に様々なスタイルに変貌しつつ、現在に至っている。

120年程の歴史しかない、工芸品の要素の強い日本のステンドグラスは、建築の大きな内部空間に対応出来ずに現代にまでそのまま歩を進めたことが現代建築に美しく調和することが出来ない理由の一つになっている。

現在ガラスや鉛の腐食が進み深刻な状況になっており、80年前後の周期で窓から降りしける修復が行われている。最近では教会の窓の外部にも一枚保護ガラスを施工し、空間の空気層を循環式にして湿度を上げないような工夫がされている。取り付けられているステンドグラスが、未来永劫光り輝く神からの光を教会の内部に伝えてゆくような理念に比べ、日本の場合は次の世代に引き渡してゆく考えを持ち合わせていないことにより非常に脆弱な施工方法になっている所が多く見受けられ、高温多湿な日本の気候、木造の建築物、文化財的価値を持った作例が少なくなく修復が急がれる。

当光ステンド工房が修復に携わった仙台ラーハウザー記念東北学院礼拝堂は、横浜で活躍したJ・H モーガン設計による1932年竣工の建物で、地元産の石による堅牢な造りで東日本大震災にも

耐えている。ステンドグラスはイギリスロンドン、ヒートン・バトラー・アンド・バイン工房の作になる。施工方法はヨーロッパステンドグラスの伝統にのっとった補強がされているが、鉛棧の劣化により平面性が失われ、危機的状態であった。

横浜英和学院の例は、行方不明のステンドグラスが悲惨な状態で見つかり、修復をし

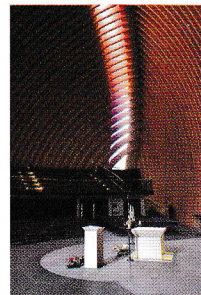
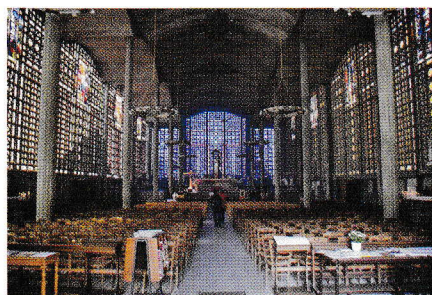
て新校舎に再利用されている。横浜市開港記念会館の三窓の場合は、稚拙な補強方法によりかえって歪みが増長され、又、煙草の煙による汚れは想像を絶するものがあった。

横浜に残る文化財的価値のある作品はほとんど瀕死の状態であり、早急な対策が望まれる。

一方、現代フランスを主とする教会建築に施工されているステンドグラスは、例えばオーギュスト・ベレ設計のノートルダム・デュランシー教会にはいち早く600×600のプレキャストコンクリートのパネルにモーリス・ドゥニ原画のステンドグラスが建築壁面すべてに使われ、光の壁となっている。竣工は1923年になる。現代ステンドグラスの曙とも云われているアンリ・マチス設計のロザリオ礼拝堂の作品は、南仏ニースに近いヴァンスの郊外山の中腹の地において、光溢れる空間を見事にマチスの結論として創造している。アクションペインティング作家と云われているピエール・スラージュ原画による作品が、山間の巡礼地コンクのサント・フォア教会にある。現代抽象のステンドグラスがここから始まり、様々な礼拝堂に次々と使われるようになった。パリのアリアンス教会には、ポップアーティストのマルシャル・レイッスによる大胆なパソコン原画から、シルヴァカンヌ礼拝堂には、サルキス・ザブニヤンによる一枚ガラス板へのミニマリスティックな絵付け作品、パリ郊外大学都市クレティユには現代建築にウド・ゼンボックの光空間を見事に演出した建築とステンドグラスが一体となったノートルダム大聖堂。昨年末にはロンドンウェストミンスター修道院教会にデービッド・ホックニー原画による作品が使われている。ヨーロッパではパブリックな性格を持つ教会堂は修復の連続性を受け継いでおり、ステンドグラスも同様修復が繰り返されている。

日本には教会や公会堂、病院など、公共性のある建物の保存には消極的な面があり、これから100年後に残っている建築物とそれに付随するアートワークはどのような末路をたどるのか想像すると、背筋が寒くなる思いに駆られる。

後世に残すべきステンドグラスを含む文化財への正当な価値判断が出来得る人材と、技術者の育成と、各自自治体などの意識改革が必要に思われる。

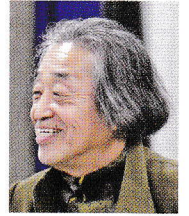




## aaca30 周年記念事業

### 座談会「市中の山居」

# 土木・ランドスケープ・建築・ アートからのアプローチ



情報文化委員会委員長  
日本建築美術工芸協会会員

坂上直哉

昨年（2018年）11月30日、母校・東京藝術大学で開催した座談会「市中の山居」は、お蔭様で定員を上回る盛況で好評の内に終えることができた。これもひとえに登壇者、関係者、当委員会メンバーの尽力の賜物だった。紙面を借りてお世話になった方々にお礼を述べたい。

座談会のテーマを定めるにあたっては、東京都心の現状を取り上げようということになった。2018年頃までに280本の高層ビルが林立し、その35%を占める高層マンションに多くの人々が住むという現在進行形の現実に憂慮したからだ。そのような過密集中の都市空間で、子ども達の心を育む、遊べる住居空間をどのように創っていただけるだろうか。

以前から気になっていた「市中の山居」をテーマに提案した。商人による自由都市として発展した16世紀初頭の堺は、自然と隔離され、近未来の東京と重なる。文化の主体はその土地に住む人だ。当時堺で編み出された「市中の山居」という所作文化に、解答が見つかるのではないだろうか。

職においては各分野のプロで有りながら、いわゆる建築家、ランドスケープアーキテクト、アーティストの範疇に納まらず語り合いたかった。

そこで、まずお願いしたのが内藤廣氏だった。あるプロジェクトで紀州を訪れた際、代表作「海の博物館」に偶然出会った。もしアーティストとして共に仕事をするならば、建築家の深井戸を彫るような思考、素形と繋がった結び目への共感、そして、その建築空間への深い理解が求められる“稀な建築”。強烈なインパクトを受けた。

建築から土木まで精通している内藤氏は、東京大改造10大プロジェクトの一つ渋谷駅中心地区街づくり調整会議の副座長を務め、都市景観における異なる職域によるコラボも提唱している。今回の座談会は氏なくしては有り得ない

と確信した。

もう一人の登壇者、ランドスケープアーキテクト・三谷徹氏については、ピーター・ウォーカー氏に師事されたと聞き、少々危惧があった。タナーファウンテンの霧を浴び感動した記憶と共に、日本国内のワークでは植物の命に無配慮な幾何学的処理に疑問を感じていた。しかし、三谷氏の代表作、品川セントラルガーデンに行ってみて合点がいった。

公園は南北約400m 東西45mの長径のサイトは超高層ビルに挟まれている。晩夏、まだ主木の桂もその葉を茂らせていた…高層ビルと植栽のせめぎ合いの芸、アートとも建物とも言えない幾つかのホリーの空間での役割とその思考に魅せられ、当日の登壇者と参加者の共通事例として話しの発端とさせてもらうことにした。

さて、アートからは、私が登壇する羽目になったのだが、台本があるはずもなく、どの方向に話が流れていくのやら…覚悟を決めて当日に臨んだのだった。

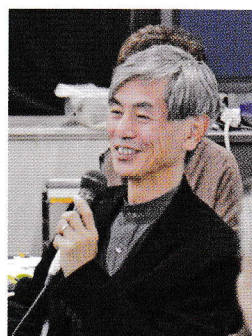
私個人として最も印象に残った発言は、内藤氏の「土木の人達は“こころ”が綺麗、もともと海が好き川が好き、人のために生きる。建築家は自分のことしか考えていない…土木は大乗仏教」。明治以降のものづくりに関わる的確な指摘、特に近代自我という禁断の実を食べてしまった建築家、アーティストには至言と受け取った。

当日、風景に携わる異なる職のパネラーが同じ壇上で忌憚なく発言した言説は刺激的だったのか、多くの方々から「面白かった」メール&メッセージを戴いた。参加者157名の内、学生30名の参加は勇気を与えてくれたが、母校藝大からは2名。卒業生としてはガッカリだった。

尚、座談会はYouTubeにupされている。ご覧頂ければ幸いです。



会場風景



三谷徹氏



内藤廣氏



露口典子氏

# 「山梨・静岡地区 建物視察会」を案内して

静岡県庁交通基盤部  
日本建築美術工芸協会会員  
早津和之



平成30年12月7日と8日に、JR甲府駅に集合して、好天に恵まれ36名の参加のもと、いつものようにハードな視察会がスタートしました。

私は静岡県の建築工事統括として、配布資料を準備して車中で説明を行い、案内人として参加者が満足いただける視察会を心掛けました。

1日目の「富士山世界遺産センター」では設計趣旨から建物の特徴や工事の苦労話をさせていただきました。2日目は展望施設「日本平夢テラス」では富士山が見れず大変残念でした。富士山静岡空港近くの「ふじのくに茶の都ミュージアム」ではお手前での静岡茶を嗜んだり、お茶所静岡ならではの風情を楽しんでもらいました。

最後の「ROGIC」では、視察会に参加の建築家の小堀哲夫さん自らが概要を説明してもらい、施設内外を歩き回りました。  
(→27p参照)

### <1日目> 山梨文化会館

最近、免震工事を行って丹下健三の設計趣旨を活かしたリフレッシュ工事を行った。

### 山梨県立美術館

ミレーの展示で有名な美術館で、前川國男の設計思想を活かし、維持管理でよく使われている。

### 富士ハーネス

東大の千葉学設計の盲導犬の訓練施設で、富士山ろくの大きな空間に建っている。

### 富士山世界遺産センター

8,000ピースのムクのヒノキ材からなる、逆さ富士をイメージした、センターが富士山本宮浅間大社近くに建設された。逆さ富士が映る水盤にも、建築家坂茂は力をいれた。内部はスロープとなっており、富士山頂への登山体験もイメージできる。途中の休憩所には富士塚があり左官 挾土秀平さんの作品がある。喫茶コーナーに坂さん設計の紙管を使った椅子が並ぶ。50万人が来館。

### <2日目> 日本平夢テラス

昨年11月3日にオープンして30万人が来館。プロポーザルにより隈研吾が選ばれ鉄骨構造にヒノキのムク材を天井組や階段、天井のルーバー材に、外壁にはスギの板材による大和張により八角形の展望台を設計した。展望回廊は静岡市が発注、県はシンボル施設を発注した。木材は主に静岡市内の材料を用いていた。

朝一番で観光客も少なく、この場所からみる富士山はまさに絶景だが、今回は顔を見せず残念。展望回廊からは、羽衣の松で有名な三保の松原から、南アルプスまで360度のパノラマが楽しめる。

### 草薙総合体育館（このはなアリーナ）

プロポーザルにより建築家内藤廣が選ばれ、屋根荷重を受けるスギ集成材14mや天井や壁ルーバー材として、静岡県西部の天竜の産地から約940㎡を使用した、バスケットコート4面をもつ楕円状の体育館が平成27年4月に竣工した。中間免震層となるRC水平リングをもち、重要度係数1.5をもつ耐震に配慮した建築物で施工難度は当時全国一難しい建物であった。居心地のよさはすばらしい建物である。

### ふじのくに地球環境史ミュージアム

県立高校の廃校を活用した全国47番目となる県の博物館で、地球環境に注目し、展示に高校の机や椅子を利用し、展示内容にも工夫を凝らした結果、DSA日本空間デザイン賞の大賞を受賞した。

### ふじのくに茶の都ミュージアム

旧金谷町が所有していた建築物を静岡県が購入してリニューアルオープンした施設で、世界のお茶から日本茶までお茶の栽培から効用まで情報発信し、レストランやお土産ショップが充実した。綺麗さびの小堀遠州の庭や茶室を復元しているので必見。

### ROGIC

日本建築学会賞とJIA建築大賞を同時に受賞した建物で、内部写真は撮影不可で、小堀さんから写真はがきセットのプレゼントをいただき、感謝。階段状の立体空間に、ガラス屋根から柔らかな光が入り、前面の池からは風を取り入れるなど環境に十分配慮し、検証も行っている。黒を基調にしたテーブルや椅子が印象的で、快適な居場所を巧みに作りだしており、研究者に評判がよいとのこと。



日本平夢テラスを望む

# 感性を刺激するワークスペースの創造

株式会社小堀哲夫建築設計事務所

小堀哲夫



古来より日本人は、外部環境との対話の方法に長けていた。戸や障子によって外部との折り合いを緩やかにつけながら、より美しく豊かな生活環境をつくり込んできた日本人の感性は、世界に誇れる一つの独自性である。

人は、風光明媚な場所であっても、そこに何もないと美しさを感じにくい。しかし、そこに建築ができることによって、「光はこんな風に変化するのか」「こんなに風を気持ちよく感じられるのか」と、その場所性を理解できる。

「ROKI Global Innovation Center-ROGIC-」の敷地は、非常に自然豊かな場所である。場から感じられる「心地よい環境」をそのまま室内に取り込むことが、この建築の役割であると考えた。しかし、これまでの近代オフィスにおいては、フラットではない環境や、自然環境の変化を建築に取り入れることは「よし」とされてこなかった。そもそも均質空間やユニバーサルスペースは、世界中で通用する普遍的な価値であるという考えをもとにしている。場所の特性にかかわらず同じような場を生み出すことで、近代オフィスの発展に寄与してきたのである。

私たちは、もう一度自然と共生した日本人の美的センスや感性を取り戻しながら、現代の技術で新しいユニバーサルスペースを創ろうと考えた。

ROGICは近代オフィスとは逆の考えをもっている。土地のアウトラや敷地の自然環境を取り込むことで、空間も環境も自然とともに変化する。環境と対話しながら、人間は働くことになる。室内環境を一定に保つことを放棄して、曖昧性や不均質性を追求し、ゆらぎのあるオフィス空間をつくる。これこそがこの建築の大きなコンセプトであり、脱近代オフィス、ないしはこれからのオフィスのあるべき姿だと考え、人間と働く場の在り方を問い直すことを大きなテーマとした。

研究施設という特性上、実際には直射日光や空調の劇的な変化を避ける必要があったため、より自然に近い“半外部空間”からより機械に近い“均質空間”がなだらかに変化する「グラデーションオフィス」という要素と、ガラスの大屋根とフィルター天井でドーム状に全体を包み込む「フィルトレーションルーフ」という要素、この大きな2つの要素によって空間を構成した。

建築の体験として圧倒的に感じられる、木格子天井と「ロキフィルター」による「フィルトレーションルーフ」は、この企業のアイデンティティである。障子のような素材感をもつ「ロキフィルター」によって、ガラスの大屋根から降り注ぐ直射日光は柔らかい光へと変わる。陰であったり、映る木々の揺れだったり、自然を映し込むマチエールとなり、人々を感動させるキャンパスとなるのである。

天竜川から吹く心地よい風が室内を通り抜け、人は働きながら移ろう自然を感じとることができる。立体的に積層したワンルームのオフィススペースは、間の連続でエンジニアに一体感をもたせ、俯瞰する視点を生み出す。ゆらぎのある空間や俯瞰的な視点、働く場所を自発的に選択していく動きは、エンジニアの創造的な思考に影響を与えるものと考えている。

2013年10月に稼働し始めてから5年が過ぎた。エンジニアとの会話から、「こんな気持ちのよい場所を見つけた」という言葉を聞いたたびにとてもうれしく思う。なにより驚いたのは、入居してすぐにエンジニアがおのこの感性に響くスペースを見つけ、自発的な運用提案要望が出ていることである。すべてが機械仕掛けではなく、人間が自然の一部として感じられる建築空間を取り戻すことで、より豊かな発想や自発的行動を生まれ、研究所全体がさらに変化していくことを願ってやまない。



(撮影：新良大)



(撮影：新井隆弘)

## ■新入会員・会員の異動 2019年1月～3月(敬称略)

2016年9月 個人情報保護法の改正が成立した事を受け、個人は氏名のみ、法人は会社名・代表者又は担当者を掲載致します。

## 《新入会員》

個人会員	ユール・フィル(美術家)、 三瓶奈美(アジア開発銀行研究所)、 水谷誠孝(名古屋学芸大学)、 加藤令吉(彫刻家)、		
法人会員	(株)イビデン グリーン テック	東京支店営業部長 佐藤洋一 担当 代表者と同じ	〒141-0031 中央区日本橋馬喰町 1-14-5 日本橋Kビル3F TEL.03-5847-8731
	(株)日鋼 サッシュ 製作所	東京支店長 峯 吾郎 担当開発営業 鈴木 誠	〒335-0025 埼玉県戸田市 南町7-8 TEL.048-447-4411

## 《会員の移動》

個人会員	小岩金網(株)	氏名変更	西村康志 (前 高橋 賢)
法人会員	ナブコシステム (株)	住所変更	〒100-6032 千代田区霞が関3-2-5 霞が関ビル32F TEL.03-5251-3848
	太陽工業(株)	担当者変更	首都圏営業本部 第2営業部長 藤岡誠二 (前任 中島康友) TEL.03-3714-3470
	三基ルーバ(株)	担当者変更	営業部部長 村上 勉 (前任 秋山光和) TEL.03-5645-7888
	(株)ユニオン	担当者変更	営業部営業開発課 沼田健一 (前任 土屋照雄) TEL.03-3630-2058

## 編集後記

会報83号(春号)では、昨年12月12日に開催されました平成30年度 設立30周年特別記念会、第28回日本建築美術工芸表彰式、特別功労表彰式を特集いたしました。日本建築美術工芸賞は、今回から公開審査が行われ、今後の公開審査実施に向けた検討も行われています。また設立30周年を記念して、日本建築美術工芸賞にAACAA賞、芦原義信賞(新人賞)に加え、建築家・美術家・工芸家・デザイナーたちが連携協力し、芸術性豊かな環境と景観の創造を目指した作品に贈られる美術工芸賞が設けられ、協会の設立趣旨に叶う日本建築美術工芸賞になったのではないかとのご意見もいただきました。

また、「時代の華一輪」では今回の特別功労賞を受賞された飯野毅一会員をご紹介しましたが、飯野毅一会員は、協会設立当初からの会員ということで設立30周年に相応しいお話を伺うことができました。

会報は、協会活動に長年携わられた方々から新しく会員になられた方々のご活動を幅広くご紹介していきますので、会員皆様からの寄稿もお待ちしております。

 2019.4 no.83

発行人 会長 岡本 賢  
発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会  
〒108-0014  
東京都港区芝 5-26-20 建築会館 6階  
TEL 03-3457-7998 FAX 03-3457-1598  
URL <http://www.aacajp.com>  
E-Mail [info@aacajp.com](mailto:info@aacajp.com)

編集 広報委員会  
委員長 飯田郷介  
会報担当副委員長 野口真理  
会報編集委員 五十嵐通代 石田真人 置鮎早智枝  
竹生田 正 田島一宏 中村弘子  
松本治子 三上紀子 山崎和子  
山崎輝子 山下治子 吉田 誠

編集制作協力 株式会社 アム・プロモーション